

石植の研究



(題字) 武蔵工業大学 柘植陽太郎先生

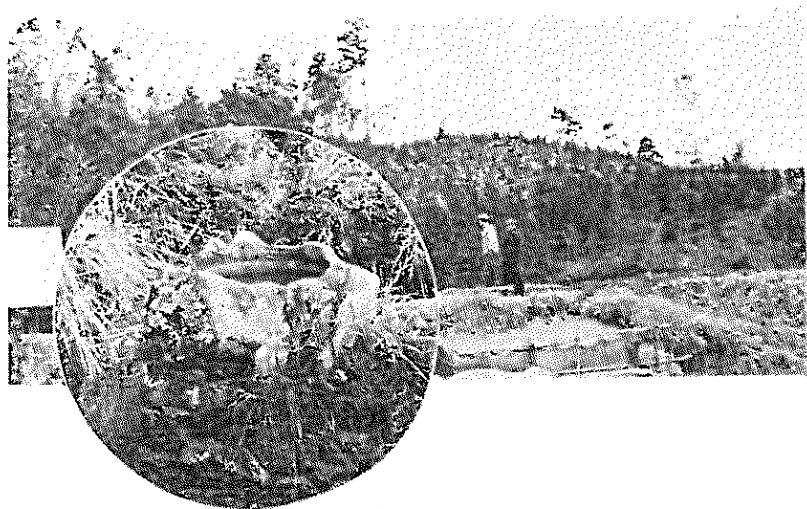
柘植氏の研究

改訂版

柘植宗澄



徳川直参旗本 柘植三之助英俊
(文久二年三月三日写)



柘植郷宗清城址と
梅ヶ枝の手水鉢



松尾芭蕉翁誕生地記念碑前にて
芭蕉研究家松尾徹斎翁と筆者柘植宗澄

柘植郵便局の
風景スタンプ



この風景入スタンプは三重県柘植郵便局に新らしく一月十一日から備付けられたもので、希望により窓口に出した書状と絵はがきの引込消印として使用するほか、五円以上の郵便切手を貼ったものと五円以下の郵便はがきに対して記念消印の需めに施することになっている。図案は油日嶽と河原谷キャンプ場を描き、芭蕉翁木像と山つつじを配したもので、これに描かれている芭蕉翁の木像は同地の芭蕉研究家松尾早次氏（俳名桃西庵徹斎）が昭和八年芭蕉の菩提寺である万寿寺再建の折、奈良の彫刻師横山大泉氏に託して作製したもので、桧笠を前に据え茶人頭巾を被っている様材丈五寸の座像で、翁にゆかりの松尾家の家室として保存されているものである。

卷 頭 言

枯植と言う姓は非常に少ない苗字である。試みに職員録をひらいて枯植姓を拾い出さんとすれば何に言が折れることか、しかも難解氏名の部類に入るものである。よく誤まつてタクシヨクさんと呼ばれたり、ガクロだッゲウエだのと正しく読んでもくれる人が少ないことは常に我々が経験するところである。しかしこの難かしい枯植姓がいつ頃どうして出来たかと言う事やその家系についてどの程度知つて居られるであらうか、我々は日常身の繁忙にまぎれてともすれば祖先のことを忘れ勝ちである。移り住りのはげしい世は現実主義に傾き、過ぎ去つたことは考えずと言う方も多かるう、古めかしい家系の問題など老人の懐古趣味と一笑に附されるかも知れない。しかし過去があつてこそ現在があり、我々は祖先のおかげで今日あるのだと言うことを忘れてよいものだらうか。枯植姓は由緒正しい家系のもとに、七百年の長い歴史を通じてすぐれた血統を運綿と受け継いで今日に至つた。我々の祖先がきびしい封建制のイバラの中でどのような生き方をしたかを偲び、その血を承けつぐ末族の現況を広く知る事により、この尊い血を汚さず譲りまらず、次代に継承してゆくよすがとしたい。私は幾許年古大献を漁り、或いは各地同族の方に援助を求めたりして資料収集につとめて来た、その苦心の集積がこの書となつた。最初には自分の先祖の調べが目的だつたが持前の凝り性がこれに満足せず、更に深く掘り下げて枯植姓全体の精密調査に進展した。今日まで平々凡々に過して来た自分が還暦を迎える齡となつてこのような事に血道をあげるのは、枯植末族として生をうけた血の働きによるものか、或いは枯植一族の記録保存の役目を負つたのである。世に生れて来たのかも知れない。文も拙劣く印刷も不出来であるが私にとつては後世に幾す唯一の意義深い書となつた。同族の人々がこの書によつて自己の血に誇りを感じ、自分をよりよく育めてゆく気魄を燃やしてくれたら、又枯植姓の歴史を伝える記録として多少なりとも今後に役立つところがあれば私の努力も報いられるのである。

本書を綴るに当り参考とした文献資料は平家物語、源平盛衰記、大日本史、姓氏家系大辞典、寛政重修諸家譜、系図綜覧、三國地誌、日本地学辞書、大人名辞典、日本紳士録、職官録等特に郷土史研究家松尾早次氏并海部忠助氏佐藤則長氏に多大の御援助を受けたことを深謝する

枯植東源 六十歳しるす

目次

総説	1
柘植氏発祥の地	3
柘植姓の由来	5
植物としてのツゲ	6
宗清の系図に二説	7
宗清と頼朝の關係	8
頼朝と靈山の伝説	10
平家滅亡と宗清の行方	11
古曲に現れた宗清	12
柘植郷の遺跡	13
柘植一族に木大將を討つ	15
天正の伊賀乱	16
柘植氏本傳據点	17
柘植一族家康に仕う	18
無足人のこと	19
柘植氏の系統	20
柘植氏正統派系譜	20
柘植氏の定紋	20

信用出来ぬ系図	21
柘植氏正統派分家系譜	25
山川系柘植氏のこと	32
山川系柘植氏系譜	33
伊賀の柘植氏別派	35
芭蕉は柘植の一族	37
織田系の柘植氏系譜	39
美濃の柘植一族	43
三河刈谷の柘植部落	45
各地遺聞	46
雑録	49
犯罪文に残る柘植氏	50
文学に現れた柘植姓	50
現代柘植氏芳名録	51
学校法人柘植学園	51
類似姓	52
筆者の横顔	60
あとがき	61

写真版

徳川旗本柘植三之助英俊、宗清城址と
梅ヶ枝の手水鉢、芭蕉記念碑前にて

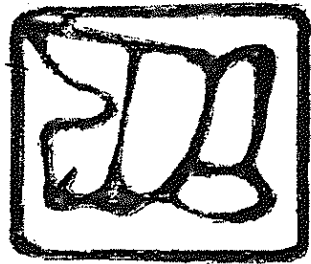
総説

柘植姓の起りは各種の資料や郷土伝説によれば平宗清の子孫から出ている。宗清は桓武平氏の家系に生れ平清盛の弟池大納言頼盛の重臣であつたこと、少年時代の源頼朝との結びつきなど古書にその名が現われている、その終る処について今一つ不明の点があるが平家没落後伊賀の柘植郷に隠棲したことはほぼ間違いないと思ふ、私は二回にわたり現地に赴いてその遺跡を調査し、保存されている系図や由緒書を見し、或いは里人の言い伝えなどを聞いて総合研究した結果、宗清自身が柘植姓を名乗つたと言う柘植家譜の記述には疑わしい点があるが、宗清の子孫から柘植姓が出たことはまちがいないと信ずるものである。当時柘植郷一帯に宗清の一族が豪族として繁栄したことは城跡の機構や菩提寺に残る古碑等によつて充分察知することが出来る。戦国時代となつて織田信長の侵攻により壊滅する迄五百年もこの地に平和が続いたと多聞院日記には伝え居る。天正九年の伊賀乱によつて柘植一族はその本拠を失ひ各地に流転、其の正統はかつて徳川家康に宿を貸した縁故により三河に移つて家康に仕え、江戸に幕府開設後は旗本に列して神君以来の譜代の臣として代々好遇を受け、寛政重修諸家譜には七家を載せている。又地方各藩に仕えた柘植氏も多く、別に戦国時代織田平豊臣家に仕官した者もあるが皆その元は伊賀柘植郷の出である。現在全国各地の柘植姓の分布状況を調べてみると東京都、愛知県、岐阜県、三重県に最も多く、特に岐阜県恵那地方や愛知県刈谷には集落的なものが見られるのは戦国時代落武者の土着から繁殖したものと考えられる。三重県伊賀町のは伊賀乱の陰残つた一族が土民化したものである。

特筆したいことは古今を通じて柘植一族に頭腦すぐれた者が多いと言う事実である、古

く伊賀に於ても柘植氏は服部氏と並んで有力な支配階級であつた。武士でないものも庄屋年寄の如く常に一般民の指導的役割を果たした人物が多かつた。姓こそ異なれ祖を同じくして芭蕉の如き偉人を出した事も大いに誇りとした。現今でも紳士録に輝やく十八氏を数え教授、医師、官吏、会社員等に有能な人材が多いことは柘植一族の毛並の良さを証明するものである。しかし何事にも例外はある。かく申す筆者などその例外凡俗の最たるものである。又柘植利平の如く、その持てる智能を善用したことは遺憾で同族の恥辱として自戒せねばならぬ。勢力争いに終始した末開国時代を経て、封建制度の崩壊から近代文化国家へと時代は移り変る。歴史を顧みて優れた血統を享け継ぐことに我等は常に誇りと自信を持ち、自らを磨くと共に祖先に恥じなき優秀な子孫を次ぎの世に送り出さねばならぬと思ふ。

茲に柘植氏の発祥から現在に至る転変の歴史やエピソードを、各項目を分けて詳述したい。



柘植氏発祥の地

柘植郷長解所用印
大正九年十月廿二日

柘植氏発祥の地は伊賀国阿拜郡柘植郷（現三重県阿山郡伊賀町）で伊賀盆地の東北部に位し、東は鈴鹿郡関町、西は阿山村、南は大山田村北は滋賀県甲賀町に接し、町の中央を柘植川が貫流、東南にかけて標高七五六米の霊山を抱いた鈴鹿連峰、又東北には標高六四九米の旗山が奇峰油日嶺に連なる山紫水明の地である。往古は柘植と呼ばれ都美恵或いは横植の文字も古文書に見えてゐる。後にこれがつぎとなり殖の字も植を用いる様になつた。東大寺所蔵の法田券に柘植郷長解所の印章が残つてゐる。天平十九年二月の大字寺資財帳に「阿拜郡柘植郷の文字があり、所領荘園の中に「阿開郡柘植庄一處」とあつて此地は当時大和太守寺の所領であつたことが判る。次いで聖武天皇が東大寺を創建されるに及び多くの封土や水田を施入された時東大寺領となつたもので、相当古くから柘植の地名があつたことが知られるのである。日本書紀壬申の乱に

『天皇到伊賀横植山口、高市皇子目鹿深越（甲賀山）以逼之』の文がある。六七二年七月三日に始まつた壬申の乱は美濃から近江にまたがりこの地一帯も戦乱の舞台となつた。又源平盛衰記に

「九郎義経は伊勢より伊賀路に攻上けるが鈴鹿山の麓を過ぎ八十瀬の白波分け加太山にぞ懸りける、この山の体たらく峯高く峙て上る、岩嶮しく谷深くして瀝り落る、水早ければ足を危くして渡る、かくて山路を出ぬれば柘植郷に至る」とあり。

○限りなく思ふ心をつげの山、山口をこそ左のむへらなれ（松葉集）

○都にもゆかぬ先より麓の、杖につげの宿のあけぼの（永閑名所記）

沿革

柘植郷は昔上柘植、中柘植、下柘植に分れてゐたが明治廿二年東柘植、西柘植、生野の三村となり、同廿九年山田郡と合併して阿山郡とし、東柘植村は昭和十七年町制を布き、西柘植村と生野村は合併して昭和三十年一月春日村を作つたが昭和三十四年三月には柘植町と春日村を合して人口一万一千百餘、戸數二千三百六十の伊賀町が誕生した。柘植の町名が消えたのは淋しいが駅名や郵便局名はまだ旧のままである。

交通

四日市から大阪に至る二級国道が東西に通じ、果道は四方にのびてゐる、国有鉄道は関西本線と草津線の分岐点に当り柘植駅（明治廿三年二月十九日開業）が上柘植にあり、下柘植には新堂駅（大正十年七月十五日開業）がある、更に柘植新堂両駅間と上野市に至る三重交通のバス路線がある。

産業

主要産物は米、麥、木材等、広大な農地は所謂伊賀米の産地で森林資源も又豊富である。最近柘植駅附近に東亜ペイントの工場が新設され塗料の生産が開始された。

観光

観光資源としては芭蕉公園の生誕地記念碑、万壽寺の国宝地蔵、余野菰園地のつつしを作り宣伝につとめてゐる。これに關して私は町当局に提唱したい、上柘植の福地城址は芭蕉さんの関係で大いに宣伝してゐるが下柘植の城址は全く顧みられてゐない、茲は宗清一族の本據とした処でしかかも附立一帯は景色勝れてゐるのでこれに手を加えて公園化するれば日置神社も含めて申し分のない観光地となるであらう、由緒ある梅ヶ枝の手水鉢も田の隅に放置されて知る人も少ない、此処にはぜひ宗清一族の事蹟を記した案内標でも設置して城址であることを一般旅行者に周知せしめるよう配慮して頂きたい、公園化の問題も個人の所有地とすれば困難もあることと思ふが何とか実現を期待したい。



柘植姓の由来

柘植氏は桓武平氏から出た伊賀の豪族でこの柘植郷から起つた、天正伊亂記に「柘植一族は池大納言頼盛の従士弥平兵衛宗清の末流」とあり、江戸系図、柘植家譜等には左の由緒書がある。

元暦二年三月廿四日長門国赤間関壇浦に於て源平相対逐平氏敗北して族滅す、其後頼朝卿池大納言頼盛及宗清を招請すれど再び世に其名を顯すを欲せず固辞して鎌倉に到らず、伊賀国に赴き山林深く隠る、此時藤九郎盛長頼朝卿の使价となり宗清宅に到り、伊州阿拝郡山田郡三十三村を宗清に賜う、盛長諱りて曰く、誠に是老休の地たり能く相役して居家を構うべしと、茲に於て宗清歿れに柘一枝を折り地にさして曰く、若し此枝成長繁茂すれば居家を此地に構うべしと、翌年柘一枝大いに繁茂して花開く、宗清甚だ喜び和歌を賦し柘植を以て氏となす、柘植の姓号是れより始まる、歌つて曰く

柘植の野にこしつる花を植えおきて我がゆく末をいわうべき哉
これが柘植姓の生れた由來であるがこの系圖に書かれた辞句には信じ難い点がある、頼朝が宗清に対し三十三村を賜つたと言ふ事は兩人の恩義關係(後述)によつてうなずける、又頼朝の側近に安達藤九郎盛長の居つた事も史実に明らかなのである、然しこの重臣をはるばる鎌倉から伊賀の山中まで遣わしたかどうか、京都への使命でもあつて立寄つたところ考えられぬでもないがどうも疑わしい、柘一枝を挿して開花した云々の件もその文章に作爲的なものが感じられる、殊に之れに依れば宗清自身が柘植姓を名乗つた事に反つて居るが種々の資料を調査したところ宗清の子が日置姓を名乗り、その子孫から柘植姓が出て居る、柘

植と言ふ地名がこれより先に出来てゐるので柘植姓は地名から生れたと考へるのが正しいと思ふ、茲に疑問とすべきことは源平盛衰記に「伊賀国住人柘植十郎有重」の名が出て居り、有重は源行家に従ひ播州室山合戦に於て越中盛次に討たれたとあるが、室山戦の行われたのは建永二年十一月の事でこの頃既に柘植姓が存在したとあるが、室山戦の行われた上柘植村に住すとある、然し十郎有重の名は柘植家譜にも無く柘植姓ではその跡らしいものも見当らぬ、殊に源家譜の人物とすれば宗清一党には全く無關係と考へざるを得ないのであるが、この問題はなを研究を待たねばならぬ。(カントは柘植郵便局のスタンブ)

植物としてのツゲ

植物辞典で見ると

ツゲはツゲ科に属し石灰地に生ずる常緑の他木で觀賞用として庭にも植へられ、春に淡黄色の小花をつけ初夏に随円形の蒴果を生じる、櫛又は印材として用いられる、之に似た木でモチノキ科に属するイヌツゲがある、とこれが一般に知られて居るツゲの木であるが、植物學上ではツゲ或いは黄楊の字を用いて居り柘植ではない、黄楊の横櫛など昔から有名である

朝づく日向ふ黄楊櫛かりめれど 何しか君が見るに飽かざらむ (馬車集)
君なくばたぞ身よそはむくしげ なる黄楊の小櫛も取らむとも思はず (馬車集)
閑かき下ひとりこぼれぬ黄楊の花 (青歌)

ツゲの木は非常に生育がおそいと記してあるから枝をさして一年で花が咲いたなどというのとは当らない、柘植とはこの黄楊ではなく、その元は柘植又はつぐえと言つて山桑のことである、伊賀の柘植では昔山桑が自生してゐたのでこの名が出たのであらう。

宗清の系図に二説

平宗清の家系をみると桓武平氏でその系図に二説あり、桓植家譜によれば

桓武天皇——葛原親王——賜平姓高棟王——惟範(中納言)——時望(中納言)——貞材(從四位上伊勢守)——親信(參議)——行義(武藏守從四位下)——範國(伊予守)——經方(民部少輔)——知信(少納言)——信範(兵部卿)——信實(平六少納言從四位上)——宗清(石京太夫正四位平兵衛尉)

右の様になつてゐるが今一本の系図、坂東諸流綱要には

桓武天皇——高原親王——高見王——賜姓高望——國香(鎮守府將軍常陸大掾從五位上)——貞盛(鎮守府將軍武藏守陸奥守從四位下)——惟衡(帶刀長陸奥守從四位下)——正茂(前守帶刀長從四位下)——貞季(駿河守從五位上)——正季(佐渡守從五位上)——範季(進平太)——李房(進三郎大夫)——李宗(右兵尉)——宗清(平左衛門尉)

このように二説あり一は高棟王から出て居り、一は高望の出になつてゐるが水戸光圀公の「大日本史」は後説を採用し、桓植家譜は誤りであると左のようになら指摘してゐる

桓植家譜に宗清を以て少納言信實の子と為す、然れども東鑑等の書に見る所無し、且つ平氏系圖を考うるに信實の子に石京太夫宗清ありて然して桓植と称せる文無し、その桓植と称せるは即ち左衛門尉宗清なり、即ち桓植家譜蓋し其の同名なるを以て誤りて一人と為すなり故に取らず

つまり桓植家譜は高棟王より出た信實の子石京太夫宗清の後にその子孫をつないで系圖を作つて居るが、平氏系圖を見ると石京太夫宗清の後は全く別の名でその宗清は別人である

そこで判る、私は光圀公の判断が正しいと思ふ、寛政重修諸家譜には桓植家譜の記載をその僞挿入れで高棟流桓植と記してあるが、後説をとれば「高望流桓植」が正しい、がそのいずれにしても桓武天皇の血をひく家柄であることは変りがない。

宗清と頼朝の関係

前項の頼朝が敵であるべき宗清を鎌倉へ招かんとするには理由がある、頼朝の少年時代宗清とは深いえに結ばれてゐた、即ち平治の乱に十三才で初陣を勤めた頼朝が父や兄にはぐれて逃げ近江へ向う途上、美濃國の原で宗清に捕へられ京へ連行され、時が過ぎる、後清盛の崩命によつて頼朝の命絶たれんとした時、頼盛の母池の禪尼が清盛に再三命をいれた結果頼朝は助命され伊豆へ流されることとなつた、その間頼朝は宗清の家に預けられ情状を受けたのである、この経緯については平家物語や東鑑にも記述があり、吉川英治氏の「新平家物語」にはかなり詳しくとり上げられてゐるが、大日本史記載の宗清伝全文を左に掲げよう。

平宗清 弥平左衛門と称す、或いは弥平兵衛に作る、鎮守府將軍貞盛八世の孫、左衛門尉李宗の子なり、平頼盛に仕う、頼盛尾張守たるに及びて宗清を以て目代となす、永暦元年源義朝誅に伏す、其子朝長死に頼朝逃ぐ、宗清尾張より京師に入らんとし、路に頼朝に遇う、就いて之を擒に、青墨駅に至りて朝長の墓を掘りて其首を獲併せて之を六波羅に送る、清盛頼朝を宗清の家に囚えしむ、刑を行ふ日あり、宗清頼朝に向いて曰く、郎君死を免れんと欲するが、対て曰く、侂元以来父兄宗族夷滅して將に尽きんとす、冀くば

僧となりて冥福を修せん、宗清意之を慰む己にして宗清池の尼に托り告るに頼朝の意を以てす。尼測然として之を哀れみ乃ち平重盛に囑して清盛に説きその死を宥めしむ。清盛聴かず尙刑期を緩む、金々義朝の五七日忌至る頼朝卒塔婆を作らん事を請う、宗清爲に百枚を製して之に与う、頼朝手づから佛名を写し衣を解き僧に施す、禅尼聞て益々之を哀み營救備に至る遂に死を免る事を得たり、尼を以て頼朝深く宗清を徳とし平氏を撃つに及びて毎に將士に試めて宗清を害する勿らしむ、平氏の西奔するや宗清頼盛に従て京師に出る、頼朝池尼の恩を思い頼盛宗清を鎌倉に招致せんと欲す、宗清往くを欲せず頼盛之を強う、宗清固辞レ旦曰く「公鎌倉に至らば必ず臣を問わん、請う爲に辞すに疾を以てせよ」と乃ち頼盛を送り近江野路に至りて辞レ帰る、直に屋島に往きて宗盛に仕う（東鑑）頼朝宗清を召し見て之に莊園を予へんと欲して豫め文を書し、鞍馬頼常を備へて以て其至るを俟ち、又將士三十人に命じ各々鞍馬驛馬及び頼常を以て宗清に贈らんとす、己にして頼盛鎌倉に至りて曰く「宗清疾を以て来らず」と頼朝以て遺徳となし乃ち其擬する所の給物を以て悉く頼盛に贈る、平氏亡ぶるの後宗清遁れて終る所を知らず

右稿中にある「目代」とは大守の代理として任地に居る者の称で、宗清は尾張国大守に代る重垂を役目を勤めたのである、又青墓駅とは関ヶ原に近しい岐阜県不破郡青墓村で現在は赤坂町に合併した

頼朝が昔の恩を忘れず宗清に報いんとしたことは流石に立派である、然し頼盛が味方の戦列にも加らず敵であるべき頼朝の招きに応じたのに反し、断固としてこれをしりぞけた宗清の態度は武士として実に見上げたものと言うべきであらう。

頼朝と靈山の伝説



伊賀町の中央を貫く極植川の清流に添つて靈山の北麓に拝野という小字がある、芭蕉の生地と伝えられる所であるが、平治の乱に敗れた頼朝が父義朝と共に尾張へ落のびる時、拝野の里に一泊し遙かに靈山寺を伏拝み、源氏再興を祈願したという、又宗清に捕へられて後頼朝が命乞いの叶うに御札に伊勢参宮の途次宗清と共にこの里を通り掛つた時、靈山の頂きから御末光を拝し、これこそ大神宮の御末光と信じ、参宮に及ばずと京へ引返したこの靈験があつてからこの里を拝野と呼ぶようになったと伝えられている。

靈山の頂上には平安朝の初め伝教大師草創の大伽藍があつたが天正の乱に兵火で焼失し今は石室に聖観音の青銅立像（高さ三尺七寸延宝三年の作）を安置するのみ、この観音像を頼朝が信仰したと伝えられ、三田地蔵に左の如く記してある

「靈山寺法興山 按傳教開祖の靈区たり、山頂に故地あり、偶元の乱平族宗清本郡の吏たるを以て頼朝卿此に囚獄せらる、頼朝この像を景仰し池禅尼の恩を得て首領を保ち統一後此像頼朝の夢想のこゝとあり、頼朝先の恩を懐い重修すと言ふ、其後天正の兵火に回祿して此遺像のみ存す、延宝乙卯弘福鉄牛茅舎を興し中古の祖となる」

是に依れば頼朝が靈山に囚獄されていたと言ふのであるが、これはどうも疑わしい、宗清が頼朝を捕えて京都六波羅に到着したのは永暦元年（三〇）二月九日で同年三月十一日には京都を発つて伊豆に護送されて居る、其間僅かに一月京都の宗清宅に滞在した此ヶ月の間に伊賀の靈山まで移送するヒマがあつたかどうか、甚だ疑問である。

平家滅亡と宗清の行方

壇の浦に於ける平氏一門の最期は「平家物語」に見ても壮烈そのもので、八歳の守徳帝を擁して西海の底深く沈んだ哀話の後世に永く語り伝えるが、宗盛父子が廟となつた事を除けば一門悉く烈戦して難に殉じた源氏が父子兄弟一族相殺して亡びた事に比べれば武士としていさぎよい最後であつたと言えよう。牧善の祖宗清がこの一戦に参加していたかどうかは判らない、東鑑には「屋島に往き宗盛に仕う」とあるのみで其後の消息が不明のため、前記のように大日本史には「宗清遁れて終る所を知らず」と記している。平家物語によれば敗戦後伊賀の山中に隠棲したことになつてゐるし、寛政五年の著書五分庵夢夢の「芭蕉翁繪詞傳」中に宗清の事蹟を詳述し「年頃領せし伊賀国阿拝の松植の庄に至り歳を變へて隠れ忍びて住みし也」と述べて居る。又下杯植の松植家に伝わる先祖由書には

代々宗旨浄土宗京都智恵院末寺下杯植法縁山西光寺累代之菩提所也
自西光寺本山指出不知開基松植寺平兵衛宗清菩提所与書
とある。只異説としては肥後文獻古城寺草場古城の條に
「天正の頃伊賀野次郎三郎島津勢に攻められ落城、伊賀野の先祖は平宗盛の臣伊賀十郎兵衛宗清と云平家没落の後當国に下向して住居せり」と記してあり、平宗清が改名したものと假定して肥後の早尾村が終エンの地と言う説であるが、これが果してその宗清であつたか疑問である、いづれにしても檀の浦敗戦後平家族の詮議滅亡しい中に宗清が身を全う出来たのは頼朝の庇護があつたからであらう。

宗清の仕えた池大納言頼盛はその所有する莊園全国三十四ヶ所に及んだと東鑑は記している。伊賀では長田庄、木造庄、建田庄などが所領であつたから宗清にとつても関係が深い殊に頼朝から阿拝山田三十三村を賜つたとすれば尙更の事である。又伊勢平氏との関係も重要な鍵となる。伊勢平氏とは平維衡（貞盛の子）以来伊勢に住んだ一族が當時守瀬津を基として北は桑名に東方三河から西伊賀地にまでのびて繁殖していた、宗清もその一族に當るし同族関係の惟綱の娘が宗清の妻となつて家清を生んだことが平氏系圖に記されて居る、この家清が日置太郎家清と名乗つて伊賀に住んだ事から見ても、宗清がこの地に隠棲したことはまちがいないと思ふものである。

左 清 宗

現わ 曲に 古

平家琵琶の古い典型である荒神琵琶の語りもの「くずれ」の内の一曲「宗清屋形の段」の一節に、弥平兵衛宗清が常盤御前母子を六波羅へ引立てる時宗清の専白妙が源氏は三代相恩の主であると言つて嘆くくだりがある、この白妙は平假名盛衰記四段目にも出る源義淳の娘である、宗清の先祖が源氏に仕えたといふ事もあり得るし事が源の出であれば宗清が頼朝に好意をもつた事も肯ける、この琵琶から描つたと思われる常盤津に「恩愛積関守宗清」がある、常盤が三男を抱えて雪の夜道を落込む途中宗清に捕えられ、常盤は三男を助けるため清盛の館に連れ行かれると言ふ筋、又兼太夫狂言「谷嫩軍記熊谷陣屋」に白を預り、弥太六と変名して御影に隠棲し、屋島、壇ノ浦など各地に平氏亡將を弔うため、施主不明の墓を立てたという筋書になつてゐる、これらの物語は事実ではないにしても歴史上一何らかの根拠があつて仕組まれたものと思ふ。

柘植郷の遺跡

宗清城址

宗清一党が本拠としたのは下柘植で押野の里から約一里今戸教百を越える、その中出という小字に城址がある。西川左仲と言う医者の館があつたので里人は左仲屋敷と呼んでいる。今も西川の所有地である。其後方の高地が城跡で今は何も残っていない。が宗清一族の日置松尾西川安川高井等諸氏が居を構えた所である。道路をへだてて更に一段高い処を米地の城といふ。是も一族で後に柘植を名乗り徳川家康に仕えた米地丸左衛門政次の居城跡である。愛田村日置にも一族の屋敷があつたらしく日置門、日置下屋敷の地名が残っている。下柘植を本城とし、愛田に下屋敷があつたのかも知れない。「三國地誌」によれば「平宗清は柘植郷愛田村地名日置に寓居す故に子孫日置を以て称号とす」とある。此事については他に文献もないが宗清が先に住んだのは愛田村で、後に下柘植へ移されたのではないかと考えられる。左仲屋敷から少し下つた道の北側に小祠があり石地蔵が祀つてある。これが宗清堂で側にかなり古い石灯籠が残つて居る。

日置神社

外敵防禦に神仏の加護を得んとした事は既に戦国時代以前に於て各地に見られるが、宗清一党の守護神として城址近くの日置神社が祀られている。大音は一族が軒伝いに参拝することが出来たという。三國地誌には「三社明神（下柘植村）日置大明神（愛田村）神明・天王・諏訪の三座を祀る。弥平兵衛宗清造屋す。二の神石あり一は金剛石と云社の前にあり。二を神度石と云里中にあり」と記してある。又下柘植の神社に就ては「将慶長の頃愛田より勧請す」とあるので愛田村の方が古いことが判る。

とすれば宗清建造すというのは愛田村の方で、従つて宗清が先ず住みついたのは愛田である事がいよいよ有力となつてくる。この愛田の神社は明治四十一年に下柘植の日置神社へ合祀したので今は何もない。この神社の春祭四月十日には無形文化財冠談踊というのがあり毎年愛田と下柘植から交代で奉納しているが、昨年経済上の理由で中止したのは惜しい。梅ヶ枝の手水鉢 宗清の作と伝えられる梅ヶ枝の手水鉢が左仲屋敷の一隅にある。三公殊の外珍重されたが不思議にも毎夜子供泣きに似た怪音を発し、時の碩学阿部宗全にも如何なる訳か解明出来ず、故郷柘植を慕ひ泣くのであろうこのまま將軍家に保有すれば不吉を招くと、柘植の里へ送り返したと言ふ因縁つきの夜泣石、高さ三尺中二尺、その形容頗る優美なものである。

西光寺

法線山西光寺は宗清の菩提寺であつたが天正の織田侵攻の際兵火で焼失し墓も寸断されたとのこと。現在下柘植にある浄土宗西光寺には宗清一族である山川の子孫に當る柘植家や、西川家の墓がある。広い墓域に人の文程もある院殿居士の立派な古碑が門の字型に立並んでいるさまは、いかにもその昔豪族として此地に君臨した柘植一族の繁栄を偲ばせるものがある。

福地城址

上柘植の中央部字山出に福地城址がある。押野の里から東約五丁柘植川の南に當る。宗清の二男福地伊予守宗隆の居城で宗清一党の威勢を張つていたが天正の伊賀乱で落城した。下柘植の城址とちがつてこゝには石垣の一部や柱の礎石などが残つて居り、城跡跡なること歴然たるものである。中央の盆地は周囲の土堤を築くために廻り下げてあり、その広さは二段二畝歩もある。此処は今芭蕉公園と呼ばれて松尾芭蕉誕生地記念碑が建つてゐる。

柘植一族 仁木大將を討つ

等相集まり又柘植党と接戦し、宗家よくこれを追討つたが宗家は遠州原野屋に於て卒した
(柘植家譜)この事について下柘植に現存する由緒書には左の様に記されている。
国屋形仁木大將柘植侍を攻めし事あり、柘植惣武士者徳井と云屋敷に取籠め伊賀總武士
徳井屋敷に推寄攻戦、寄寺大將国屋形討死寄寺敗軍、此所下柘植の百姓田中と云者屋形
の死骸を踏付け甲冑を剥取り屋形死骸を土足に懸けし為め足跡となりしと申伝う。
今も下柘植の田の間に松樹と塚が残つて居り屋形塚と称して居る。

天正の伊賀乱 柘植氏本拠壊滅

天正七年織田信長の次男信雄は伊賀に攻入つたが成果上らず更に同九年九月信長は圧倒的な大軍を配して伊賀の四方から侵入し、服部党、柘植党など国衆の一週間にわたる激しい抵抗も遂に空しく敗れて他国に流亡し、多くの神社寺

院も焼仙われた。多聞院日記天正九年九月の項に左の様に記録されている
三日 從信長被仰付伊賀へ出勢、甲賀口ハ堀久太郎殿大將ニテ小性衆江州ノ衆、勢州口ヨリハ本所並滝川、南伊賀へハ宇多郡衆、西ヨリハ和州ノ衆、則簡順一手ニ自身ハ畑口へ、福住大將ニテ南方ノ衆召具黒田タケヲ名張へ打入、後夜ヨリ立テ以上一万余人数也云々、心督衆引入間無程可有落居云々、佛神崇重ノ国聖教教多堂社結構之処、此時可及破滅ノ段時刻到来也、但落居如何

四日 伊賀ノ機裏返衆少々在之過半落居、著尾衆少々損了云々、国中大焼ケフリ見了云々
十七日 教淨先陣ヨリ帰リ伊賀一圓落居、合戦モナク峻ニテ諸城ヲ渡テ破城云々、南ニ二三ヶ所残ルト云フ、五百年モ乱不行国也云々、靈仙以下聖教教多堂塔寺破滅、時刻到来上下ノ悲歎哀ナル事也

又貞享(一六八四年)頃の著作「伊賀記」に見られる上柘植焼打の一節
先陣滝川は早上柘植の馬宿に火をかけたりと見え猛火東西に飛がちり、雪や霞とやきこまられ、七郷に乱入し神社仏閣民屋等唯一時にやき払う折柄、柘植の一族疎染の者共他行して手に合わず残の者輩稍野村に散籠る、その人々には富田、勝長、満田、中野、決地、平岡、久田党、松尾氏等皆上柘植の住なり云々

織田侵攻により柘植の本拠は壊滅した。しかし柘植一族はこゝで全く滅びたのではない、追う者追われるもの、柘植盛衰の転変も人類の進化でてゆく過渡期の一現象にすぎない、伊賀乱を一転期として柘植一族は地方的な性格から脱皮し、新しい天地を開拓した。かつて徳川家康が伊賀地通過の功、宿を貸した縁故によつて柘植一族は天下統一を目ざす家康の大事業に参画する事となつた。柘植家譜には左の記述がある。

天正九年柘植宗能、同清廣三州に至り家康公に拝謁して曰く、「伊賀国の群兵は余曰う、伊賀国を公に獻じ従い奉るべし何ぞ信長に従わんや、伏して願わくば御書を伊賀の群兵に賜ふべし然らずんば群兵等疑いあるべし」と、是に於て公曰う「我れ信長と親交甚だ厚し、書を伊州群兵等に遺すは不可也、只信長に属し本領を守るべし、清廣等は我に属して家を三州に移すべし」と、是によりて宗能清廣伊州に帰り家康公の旨を群兵等に告ぐ然れども国中の勇士信長に属せず、同群信長軍士を遣わして伊州の群兵を撃殺す、其後清廣等三州に至り家康公に従ひ奉る、宗能はのち年老いて郷里に閑居す。

柘植一族家康に仕う

天正十年（西暦一五八二）六月二日明智光秀が徳田信長を討した本能寺の変に際し偶々京都に居た徳川家康は泉州堺から東歸の途中伊賀の土服部半蔵、柘植三之丞（清廣）以下十三名と伊賀の郷士二百人に護衛され、危険を冒し間道を超えて伊賀を通り無事決松に帰つた。服部半蔵、柘植三之丞、山口基助、菊池半助等は功によって千貫匁の祿を与えられた。次いで家康が幕府を江戸に開いた時多数の伊賀郷士を招いて御成敷番、小普請方山里明屋敷番等を勤めさせた。これらを伊賀者或いは伊賀衆と称したのである。

柘植家譜にはこの時の模様を左のように記してある。

東照宮（家康のこと）天正十年堺より伊賀地を過ぎ下柘植村に渡御の時、柘植清廣仰せを承りて同邑の者数人を幸い伊賀白子への御道しるべして関の地蔵のこゝに鹿伏兎に至らん。時に清廣言上せるは鹿伏兎の輩と柘植の者とは常に讐敵たり、故に従ひ率らば却つて大事を引出さん。計り難ければ某等は是より暇を賜るべし、御供に列せし内の米地九左衛門政次は近郷の者にも面体を知らせず隠れおきたる四五人の内にて、しかも重国方三十里の間鹿の通い路に至るまで詳さに知る者なればとて、彼米地をして案内者に奉り清廣等は下柘植に帰る。清廣は慶長五年関ヶ原の役に御供せんとて参陣せしかば奇特なりとて召出され鉄砲足輕二十人を預けらる。此間速やか下本國に帰り人数を選びて参るべき台命を蒙り、やがて伊賀國に帰り精兵二十人を具して御供に候す。凱旋の時江の国永原の御殿に召され同國伊賀郡の内に於て米地三百石を賜う。

右清廣の子孫は分家と共に代々徳川重参旗本として江戸城に勤めた。米地政次は後に柘植を名乗り別家を興し、これまた徳川に仕えた。

無足人

のこと

徳川時代藤堂藩には無足人という制度があつた。伊賀乱で柘植一族の多くは他國に流転したが残つた者は無足人と成つて郷士化した。無足とは元來足がない、無給のことである。祿は預けが苗字帯刀を許されて武士に準じて一般農民とは異なる特權的な階層であつた。菊井氏の時代からあつたが藤堂氏が農村統治に巧みに入られると、彼等は一般百姓の上に立つ優越感から藩の手足となつて村の治安に當り、有事の場合は藩の補助的軍力となつた。慶享年間の無足人帳によれば伊賀で七十五人記され、元祿になると伊賀だけで千二百余人となつてゐる。無足人は村の有力層であり大庄屋、庄屋、年寄は殆んどこの無足人で占められた。（郷土の歴史叢書より）

柘植氏の系統

柘植氏の系統は大別して三系統より成つてゐる。即ち宗清出のものが長男宗俊以下に続く正統派、宗清の辛腹の子孫から出ている別派があり、他に織田家から出た清盛流柘植氏と以上の三派から分岐して各地にその末族が現存するものと考ええる。

宗清に三子あり、長男日置宗俊に下柘植を譲り次男福地に上柘植を与え、三男北村に中柘植を授けた。宗俊には六人の男子あり、長男清正は父の称号を継ぎその弟五人を山川勝島、西川、松尾、北川と言ふ。且つ先祖は江原氏、小野氏があり其他光岡、宇川、留田、竹島、土田、高井、米地等は其門葉なり、氏族散りて諸郷に在る者亦多しと云え

とも其元は伊州柘植の出なり
 と記してある。宗清の長男が日置姓を名乗つて居り系図ではその後が南と称したり勝島と
 言つたり。柘植姓に改めたのは誰の時か不明だが宗貞、宗治のあたりではなにかと思つた。
 なを山川も後柘植となり。米地も柘植別家を興したものである。

柘植氏正統派系譜 (宗清以後のもの)

宗清 尊徳公

宗俊 弥次

清正 弥次

南と称す

宗政 平吉

勝島と号す

宗貞 弥次

清春 次郎 福地と称す

俊忠 三郎 北村と称す 北村は後木下に改む

宗治 弥次 左門

宗康 弥次 衛門

宗貞 弥次 市助

宗高 弥次 弥次 門法名道重

清辰 弥次 門法名道重

清重 修理 左門

宗國 三郎 衛門

宗安 弥次 門法名道重

宗知 市助 法名道重

宗家 彌次 左門

宗能 弥次

宗次 三三 清廣の養子となる

清廣 三三 宗能の弟
 宗吉 三三 清廣の弟 別家を興す

清廣は慶長八年伏見城の番を勤む。十九年大阪の役には供奉の列に非ずと言ふ。も
 松平右衛門太夫正綱仰せを伝うるにより与力同心卒いて勝山の陣営に至り、鉄砲放
 ち敵兵を討つ。元和八年老を以て勤を辞し寛永六年八月廿二日死す。年九十。法名宗伯。

(22頁)

柘植氏の定紋



柘植氏の家紋は左巻三ッ巴、略紋は丸に二引となつて居る。巴は即ち鞘絵(弓
 を射る時左手首に着ける皮製の具に描いた絵)の義であつて、めぐり巻く水の
 形を象つたものとある。しかし各地の柘植氏定紋を調べてみるとかなり異つた
 ものも見られる。尾張に多い織田系柘植氏の紋は同じ柘植氏でも系統がちがう
 ので瓜、五七の花桐、丸に引両筋、揚羽蝶、三頭左巴等さまざまあり。四国柘植氏は
 左三巴の下に横線二本を添えたもので、これはその祖先が高松藩主松平侯から賜つたもの
 と伝へて居る。又岐阜県恵那地方の柘植氏は二ッ巴である。どうして三ッ巴に変わった
 のか、そう言えば私の家では一ッ巴であつた。子供の頃聞いた話だが本家は三ッ巴であ
 り、今は分家だから一ッ巴と言う事であつた。妙な話だが昔の武家では家の格式というものが
 厳しかったのでその様な差別が出来たのかも知れない。知行禄高でも分家は本家の半分
 以下とされていた様で、龜山藩の柘植本家は二百石取りであつたが私の祖父は分家なので八
 十石であつた。又隠棲した場合その身分を隠すためとかそういった事が定紋の変化となつて
 現われたのではなからうか。兎祥地伊賀の柘植を調べてみると、日置神社の屋敷には
 丸に二引(略紋)が使用されて居り、同地の柘植氏は皆三ッ巴、西川、勝島、福地の一族
 も同じだが松尾は丸に剣花菱、丸に立羽、丸に矢違ひ等異つた定紋である。しかし松尾家
 の各紋は左三ッ巴と共にいすれも平家一族の使用して来た紋であるから、同族関係である
 ことはうなずけるのである。現今では生活様式の変化によつて紋の使用が殆んどなくな
 り、若い人などは自分の家の紋を知らぬ者もあるようだが、会社に社章がありそのパツチを胸
 につける事を思へば家のしるしである定紋をもつと日常に愛用すべきではなからうか。

信用出来ぬ

系

図

古来武士の家系では系図は最も大切なものとされ、現在残っているもので正真正正と思われ、至つて少ない。美濃古くから伝わる系図ならばその書体も時代々々によつて変つて居り、墨の色もさまざまに書き廻がれたものでなければならぬ。始めから終りまで同じ書体同じ墨色で書かれたものは正真正正とは信じ難い。殊に徳川の中葉から明治初年にかけては職業的な系図書師という者が居て希望に施して出鱈目の系図を作つたのである。そのようなインチキ系図が今も多く伝つてゐる。正しい系図はその直系の家のみにある筈だから分家其他にあるものは寧ろ偽物と見てよからう。正当な系図を書写したものは参考になるが、あれこれと想像的につなぎ合はせようものは全く無価値で、研究する者にとつてはかえつて迷ひの種となるものである。私も各方面で教通の系図を突見したが本物と思はれるものは一つもなかつた。しかしそれらを見し事によつて系図の正体がよく判り大要勉強になつた。大體に於て徳川時代の事は記録も揃へばあるし信用も出来るが、それ以前のことば資料も乏しく不明の事が多い。それ故に出鱈目の系図が横行したのである。現在伝つてゐる系図には疑点が多い。誤りと言うよりむしろ故意に偽作した疑ひが濃厚である。二人の宗清を混同させて一石をさして開花したなど作り事の上には、歌まで添えてある。入念さだが種々の観点から私はこの系図は信用出来ないと申う。しかもこの疑問の多い系図が幕府の作つた寛政重修諸家譜にそのまゝ記載されて、現在印刷本となつて残つてゐるのだから始末が悪い。「大日本史」で系図家譜の誤りを指摘した水戸光圀公はさすがによく研究してゐたと感心する。

「宗次」宗能の長男清廣の養子となる

寛永二年二條城西門後二條御鉦砲頭となり正保四年九月十一日田付四郎兵衛景利と共に島田松平の事を奉り常陸下総に赴く。三月廿五日御鉦砲部屋及与力同心を預けらる。慶安四年三月十三日御鉦砲方四年八月十六日布衣着服用許さる。十一月廿一日二百俵の新恩あり五百石を賜ふ。明暦元年三月廿二日死去法名龍牛。萬昌院に葬る。宗雄は宗次の長男寛永十二年大猷院殿にまみえ十九年六月廿日御書院番に列す。後父に先立ち死す。

「言清」宗能の長男清廣の次男

寛永十八年七月十八日大猷院殿（三代家光）に拝謁正保二年七月廿九日大猷院殿元年十二月遺跡を継ぐ。寛文十一年六月番を辞し小普請天和元年八月十九日大番貞享二年六月廿五日御軍司奉行四年六月十四日勤を辞し元禄六年三月廿二日死す法名崇山。目白の洞雲寺に葬る。のち代々葬地とす。帝武志言清の弟。慶安三年九月三日嚴有院殿（四代家綱）に附屬西城御小性組番士。清長弟。美清弟。宗尊弟。承応元年十二月十八日米三百俵を賜ふ。

「宗英」宗能の長男清廣の養子となる

天和三年六月廿六日常憲院殿（五代綱吉）に拝謁九月廿五日大番元禄六年七月十二日遺跡を継ぐ。九年十二月廿二日黄金五枚を賜ふ。十年七月廿六日常陸国茨城郡内にて米地二百石を賜ふ。十二年四月七日二條裏門番の頭となり与力十騎同心廿人を預けらる。

る、宝永元年九月廿九日勤を辞し同二年一月十五日死す 法名空善

宗實 生於八世門 言清の二男 宗英の嗣となる

元禄七年二月廿八日常憲院殿に拝謁 宝永三年三月廿九日蓮跡を継ぎ同三年四月五日大番 同年八月三日死す 法名元照

英利 宗英の二男 宗實の嗣となる

宝永三年十月四日蓮跡をつぐ十二月五日常憲院殿に拝謁 享保三年三月十六日大番 延享四年九月廿五日死す 年四十九 法名鏡肝

英貞 英利の五男 英利の養子となり其世を專とす

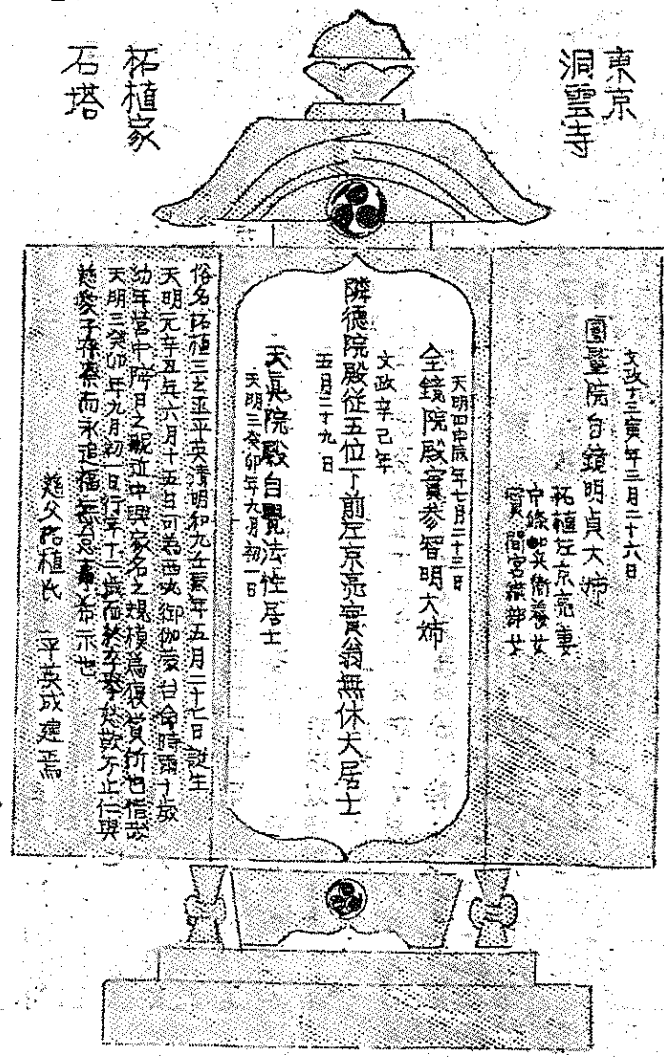
寛保二年七月朔日有徳院殿（八代吉宗）に拝謁 延享四年十二月二日蓮跡をつぐ 寛延三年十一月廿一日死す 年二十一 法名冬領

英成 丹波守從五位下

寛延三年十二月廿七日蓮跡を継ぐ宝曆十三年二月廿二日御小納戸 四月十三日御小性 明和元年十一月十三日從五位下丹波守に叙任 享永五年四月將軍日光山に詣て給う時供奉 後流鏑馬を勤め黄金を賜う天明三年五月廿六日勤辭寄合に列す 英清 天明元年六月五日西城御伽同三年九月朔日父に先立死す年十三 法名法性 貞英 英成の二男 病の左め家督にらず 長英 英成の三男 英成の三男 幕政丸に二引

以上が「寛政重修諸家譜」に記載されている拓植本家の系譜である。其後のものは菩提寺である黄檗宗龍泉山洞雲寺（大正三年目白から移転して現在東京都豊島区池袋三丁目にあり）の過去帖を調査した結果左のようになつてゐるが判明した。

東京 洞雲寺



拓植家 石塔

上図は洞雲寺にある古い石塔で廿四代英成と其長子及妻と母の法名が記してある。左側のは英成が自分先に立つて大折の憐情を示す哀切の辞句を彫つたもので、長男の俗名にも自己の名にも平姓を附してゐるところに注目して頂きたい。拓植丹波守左京亮英成の墓

英成 (左京亮丹波守)

文政四年五月二十九日死 実翁無休

長英 (順吉、哲之助)

安政四年八月七日死 七十才 勇徳

英俊 (三之助)

明治十三年一月廿六日死 七十二歳

三二 (文政八年七月生)

明治三十九年一月七日死 八十 良敏

順吉 (安政五年六月十三日生)

昭和二年十月九日死 六十八 道白

雅一 (順吉、妹セ人の二男)

昭和二十五年十月七日死 五十五 道

雅一氏が宗清から救えられたと二十九代目となる。現在には雅一氏末亡人かくさんと笑嘆順子さん。東京都文京区春日町二ノ八に居住される。明治以後静岡岡島に居られ大正二年の沼津大に罹災して系図は焼失。口絵に挿入した写真も親戚に保存されていたもので「文久二戌年三月三日十代目植三之助英俊五十六才」と記してある。三月三日と言えは桃の節句だから江戸城へ祝賀に登城の随筆を写したものが、袴の紋は三ツ巴でなくどうやら三葉葵のようだから拝領物であろう。いすれにしても武士塗の写真などは珍らしいもので、當時は写真師も稀であつたと思ふから或いは下岡蓮枝あたりの作品かも知れない。十代目と書いてあるが三之丞清廣から数えたとこの人が拾度十代目に当る。徳川家へ仕官したのは清廣が最初だから清廣を初代としたのであらうと思ふ。私はこの植植家と正統派の直系つまり純本家と考えている。

◇ 植植正統派分家系譜 (一)

宗吉 八郎 植植左衛門宗家の三男

初め兄宗能清廣と共に三河國に至り東照宮(家康)に拝謁 天正十年伊賀地を渡御の時一族と共に御尊を奉り同十三年五月廿五日歿す 年四十二 法名高金

宗吉 八郎 植植左衛門 慶長五年関原陣の時家康公に従ひ凱旋の後近江永原の御殿に召され赤地百五十石を賜ふ。後大番に列し組頭に進み寛永十六年三月西城御裏門番の頭に転ず。しばしば加増あり七百五十石命を知行し後小普請と爲る。享和八年四月朔日歿す 年六十八 法名道無 牛込萬昌院に葬る。後代々葬地とす。専は太保三郎正次のサ

宗忠 甚右衛門 母は正次のサ、大番に列し寛永十八年十二月四月遺跡を継ぐ。正保元年十月廿九日歿す 法名道寛 弟に宗辰あり 植植左衛門 孟孝の祖となる

宗普 甚八郎 慶安四年十二月十一日遺跡つぐ 後大番に列し承応三年五月十七日歿す 法名宗三

宗直 清兵衛 承応三年十二月廿七日遺跡継ぐ 後大番 延宝五年四月五日歿す 法名宗堅

宗吉 清兵衛 延宝五年七月十二日遺跡つぐ 貞享元年六月十六日歿す 年十七 法名道清

宗廣 山内 甚右衛門 大久保九兵衛忠次の二男 宗吉の養子となる 貞享元年七月遺跡をつぎ十月廿七日常憲院殿(五代綱吉)に拝謁十三才、元禄十四年十二月廿一日大番 宝永六年二條城門番 享保十五年十二月廿六日番と辞す 十六年四月十九日歿す 年六十 法名相外

昌房 甚右衛門 享保六年五月一日有徳院殿(八代吉宗)に拝謁十六年七月六日遺跡をつぎ五百四十石を知行し三百石を弟正勝に分つ十八年十二月廿日大番 寛保三年二月廿三日歿す 法名淨眞

政房 甚右衛門 寛保三年四月二日遺跡つぐ 寛延元年十二月廿二日大番となり 明和二年八月大阪城の守衛終りて帰りの時伏見駅より逐電して家絶ゆ。専は永田藤四郎道良のサ

一 茂守 甚右衛門 美濃部三左衛門茂高の養子となる

◇柘植正統派分家系譜 (一)

正勝基柘植甚右衛門宗廣の二男 享保十六年七月六日父の遺跡の内上総国望陀郡内にて二百石の地を分ち賜ひ小普請となる 十九年五月十三日小十人に列し元文元年十二月廿一日番を辞し天明元年八月二日歿す年七十六法名玄道 牛込葛昌院に葬る 事は加藤半兵衛正房の女

致清徳宗天明元年十一月三日遺跡をつぐ廿八才米地二百四十四年十二月廿二日没明院殿 (十代家治) に拝謁 事は服部新五兵衛保親の女

致安甚四郎 其並部 其又三郎

(家紋) 三頭左巴

◇柘植正統派分家系譜 (三)

宗辰 宗辰 柘植小左衛門宗普の二男 寛永九年八月廿二日大猷院殿 (三代家光) に仕元小十人に列し厚米有儀を賜う十六才 十九年有儀の新恩あり萬治二年小普請となり貞享元年十二月廿六日死す年六十八法名道雲 四谷宗福寺に葬る後代々葬地とす 事は内田傳左衛門守政の養女

宗貞 宗貞 宗普の長男 松平山城守家臣柘植跡惣左衛門宗純の男 母は服部作右衛門景の女 宗辰の養子となり貞享二年七月廿九日遺跡をつぐ 元禄六年五月十九日小十人に列し八年十一月四日御納戸番十三年十月六日新巻五十俵加増あり宝永五年九月廿一日組頭となり二百俵加賜四百五十俵となる享保八年正月廿八日御納戸番十二月十八日布衣着附許さる同十六年十二月六日死す年六十九法名待體 事は小侯佐左衛門景の女 後事は河尾伊左衛門元次の女

宗福 宗福 松平日向守家臣柘植貞右衛門景の男 宗貞の養子となる宝永五年十月十五日常憲院殿 (五代綱吉) に拝謁六年四月六日御書院番三百俵を賜う正徳三年八月廿九日父に先立ち死す法名全機 享保九年十月九日御小性組同十一月廿五日西成御書院番十六年十二月廿七日祖父の遺跡をつぐ

宗好 宗好 宗福の二男 兄宗福の嗣となる正徳三年十月廿九日遺跡をつぎ小普請となる十四才 享保九年十月九日御小性組同十一月廿五日西成御書院番十六年十二月廿七日祖父の遺跡をつぐ

宗則 宗則 宝暦八年七月三日遺跡をつぐ十月廿八日停信院殿 (九代家重) に拝謁十四才十一年六月御書院番明和四年十月廿九日死す年二十三法名雄儀 事は小宮山庄九郎昌章の女

宗孝 宗孝 宗則の長男 母は盈好の女 盈則の終りに歸み養子となる明和四年十二月廿七日遺跡をつぐ十六才 安永五年三月六日西成御小性組八年四月十六日本城後居々射録を賜う天明元年五月廿六日 六年十月廿二日本城寛政八年七月十日若君付属西成に勤仕す

盈郷長 事は内山七兵衛永泰の養女

石柘植家の当主は京京三田豊岡町居住の柘植系次郎氏で御祖父の代まで四百五十石取りの旗本であつた 系図と由來書を併載して奉られる 宗福寺は現在新宿区須賀町一〇二にあり 戦災を蒙り過去帳は焼失したが同寺墓地にある柘植家累代之墓の碑面に左の由緒書が刻まれている

柘植公諱盈貞字小左衛門其先蓋出自弥平兵衛平宗清元暦之後宗清移于伊州柘植村而子孫世居焉因以為族曾祖父柘植市助宗能有嘉慶狀 神君聞道志衆趣之時尊建元勳乃始彊禦後從闕原大阪兩役尚矣家声有由來也公始入十人組庇傳二百石尋為御納戸御番頻轉新舊依増給五十石進為其組頭又増給二百石遂為御納戸以是而衣其家坂權聚如是後振高休讓矣此為高壽院二子伊藤盈好為西丸御書院御番清次郎盈之承賢子弟也公明敏慈仁克及弟睦親戚協儀友云年冬十二月六日疾病不起春秋六十有八嗚呼哀乎嗣子盈好繼子銘日

惟此端士名器出羣 孝友記焉
克誠義冠見明世 綱綱青雲
以光烈祖永流隆芬吳才道微音靡聞
柘植英魂去而氣盛 不肖子盈好遵親戚家澤尾罪昭 誤

◇柘植正統派分家系譜 (四)

今之星譜に政次初め柘植を称し伊賀阿持郡下柘植村の米地に住せしより家号とし後柘植に復すと云
米地 東照宮伊賀地を通過の時従い奉る

政次 天正十一年東照宮伊賀地を渡御の時郷導し奉る 甲賀郡内にて米地三百三十石を賜い
大坂兩度の役に従い大番に列し寛永三年六月十七日死去法名了本 浅草新光明寺に葬す

政定 作事番 父の遺跡をつぎ大番に列し寛永六年正月十七日大坂城の守衛に在つて死す
年二十法名守三 妻は神保三郎兵衛重利の女

寛永六年大坂院殿(三代家光)に拝謁、父の遺跡をつぎ後大番となる
正保三年三月二日死す法名貞悦 葬地政次に同じ

宗正 寛永四年六月廿二日殿有院殿(四代家綱)にまみえ延宝六年三月廿九日大番貞享元年
十二月廿六日大番寛文元年五月廿三日米地を改め三百三十石を賜り七年二月十六日御蔵奉行
延宝三年二月廿八日御代官に就じ新恩二百石を賜う元禄七年九月十九日陸奥国福島にて死す
法名日源 下谷善立寺に葬る後代々葬地とす 妻は小宮山清四郎安次の女

利清 寛文四年六月廿二日殿有院殿(四代家綱)にまみえ延宝六年三月廿九日大番貞享元年
八月十八日新番元禄五年七月廿八日桐間番六年一月廿九日故あり小普請に就され米地七百五
月八日許され五月九日新番十二月十一日遺跡をつぐ十年七月廿六日武蔵常陸真壁兩郡の内にて
米地を賜う享保二年番を辞し四年四月廿四日死す年六十二法名日成 妻は小堀孫兵衛重政の女

知清 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

守清 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

八代吉宗(にまみえ寛保二年十二月三日大番延享元年七月二日遺跡をつぐ至暦三年三月廿六日書
替奉行十二年四月廿三日御勘定吟味役十月八日布衣を許さる明和三年十一月二日西城御徒頭永
七年五月十二日御先鉄砲頭八年四月十六日本城勤仕天明八年三月十二日老を告て職を辞し時服三
領之賜い寄合に列し四月廿九日死す年七十六法名日健 妻は柳沢左太郎政包の女

泰清 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

殿(十代家治)に拝謁天明八年七月三日遺跡をつぐ十一月廿九日御書院番 寛政七年四月七日番
を辞し十年五月十一日死す年五十一法名日源

英清 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

十八才 十二年二月初めマ將軍にまみえる 寛政十年八月三日遺跡をつぐ

右柘植家現在の状況不明、下谷善立寺の所在を御存知の方は通報を、日蓮宗?

◇柘植正統派分家系譜 (五)

廣正 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

正重 父廣正の死後飯山城主本多伊勢守に仕う

正通 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

正休 享保四年四月六日大番享保四年七月十一日遺跡をつぐ 延享元年四月十六日死す
年五十八法名知清 妻は柳沢長右衛門安政の女

六日川船奉行正徳二年三月六日勤を辞し小普請享保十一年九月十一日死す年七十八法名心哲
浅草正覚寺に葬る後代々葬地とす 妻は本間仁右衛門豊政の女

一30-

正徳二年八月廿六日御蔵奉行四年四月廿九日御代官、
享保九年三月十九日勘定奉行支配十二年一月廿七日死す年六十一法名良園 幸は洲田氏のサ

正徳三年四月朔日有章院殿(七代家継)に拝謁十六才享保十二年六月十二日遺跡をつ

く、延享二年十二月廿三日西城組頭室曆十一年八月三日本城一十二年十二月十五日西城に復す
守永元年八月七日死す年八十法名善翁 幸は織田隠岐守正信のサ

正安元年八月七日死す年八十法名善翁 幸は織田隠岐守正信のサ
正安元年八月七日死す年八十法名善翁 幸は織田隠岐守正信のサ
院殿(九代家重)に拝謁明和元年十二月十六日大番守永六年十一月八日遺跡をつぐ四十三才政
九年二條の番まで本番代人を十四年間勤む 文化六年十二月十三日死す

正勝元年寛政九年二月十五日御目見得同四月廿九日石山大御堂、文化七年五月七日遺跡をつぐ、文
政四年十二月廿四日大阪の番、同八年四月廿六日死す

某親部 改元戊戌年九月御納戸構にて御目見得七月三日遺跡をつぐ、御渡小普請祖被付弓の指南巻を
勤む後甲府勤番となり、延享二年九月十四日甲府にて死す

右柩植家の当主は東京郡板橋区中根、小学校長柩植宗春氏で墓のある正覚寺は台東区浅草蔵前三ノ九

◇柩植正統派分家系譜(六)

某親部 寛永六年御徒に加えられ後進物取次上巻を勤む

某親部 寛文四年十二月十日遺跡をつぐ、進物取次上巻より二ノ丸及西城山里の添巻をへ
て西城御広敷巻

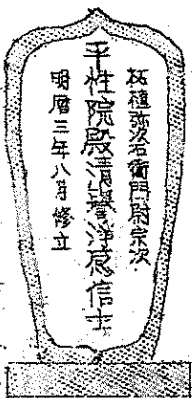
竹東屋 享保十二年五月二日遺跡をつぐ、明和五年六月朔日死す八十二法名竹信 本付福蔵
寺に葬る 幸は上野勘右衛門政長のサ

永隨 享保元年十一月廿九日御勘定 明和五年九月六日遺跡をつぐ、天明二年七月二十日
死す六十才法名瑞如 幸は岡田甚九郎のサ

竹花 享保元年五月二日御勘定 正の二男永隨の養子となり其サを勤むとす安永四年十二月十八日没明院殿
(十代家治)に拝謁天明二年五月五日遺跡をつぐ三十三才御勘定寛政九年五月六日御代官に転す

忠貞 寛政九年十二月廿二日將家家に拝謁十八才

以上各系譜は「寛政重修諸家譜」より転写した。



山川系柩植氏のこと

山川系柩植氏 この家系は宗清の孫から出て居り、初め山川を名乗
つたが後柩植姓に改めたもので下柩植の西光寺に代々の墓が残つて
居る、古いものは昔むして碑面の文字も判じ難いが辛うじて解説出

来に明暦三年のものの上掲の清次右衛門宗次の墓である、宗次は初め角兵衛と称し寛永六年藤堂に
仕え郡奉行を勤めたが後津にうつたその分家に当る下柩植の柩植次郎方に残つて居る古い文書に
よるとこの宗次は上柩植徳永寺という所に居住したらく早逝した四男宗正の菩提を弔うためがな
り広い土地を西光寺へ寄附して居り、また今も尚柩植家の分家でも死者があればその広い墓域
に埋葬するしきたりで、これは、同寺の檀家中柩植家ばかりに許され特権であると聞いた、これに
一関する西光寺住職の書附写しがある、尚筆者の家もこの宗次家から分れたものである

37-の事蹟については伊賀上野出身の平野榮助氏(弓道五段)が熱心に研究して居られ伊賀新聞や弓道雑誌にその研究文を発表された。この系統から出た松植姓は系図によると

宗清(家清)——光清
 高次(山)川——宗邦(山)川
 宗房 兼清(松植九郎左衛門尉)

家清の二男が山川を名乗りその孫から松植姓が出たことになっている。その年代は鎌倉時代元寇の前頃と推定される。現在伊賀町の旧上松植には松植姓の家が系図のある医師松植勇天氏、松植貢氏を旧家として約三十戸あり、殆んどこの系統と見られる。



芭蕉は松植の一族

俳聖と仰がれ日本文学にサンと輝やく金字塔をうち立てた松尾芭蕉、凡そ俳諧に縁はなくとも芭蕉の名を知らぬ者はなからう。併しその高名な芭蕉が松植と同じ平宗清の子孫から出ているという事は案外同族の方に知られていないのではあるまいか。芭蕉は松植説によれば正保元年(松尾儀左衛門の二男として上松植村で生れた。幼名金作から忠をエ門宗房となり、後上野に出て藤堂新七郎家に仕官した事になって居る。上松植の城址公園(松植駅から十五分バスあり)に芭蕉誕生地記念碑があらで「ふるさとや晴の緒に泣く年の暮」の句が刻んである、ところが茲から四里程離れた上野市に松尾の旧家が残つて居り、明治初年まで芭蕉の兄半左衛門の子孫が住んでいたと言ひこれを芭蕉の生家

と称して「芭蕉翁誕生之地」の石柱を立てた。ために芭蕉の生地が二ヶ所にあるという奇妙な事になつてゐる。上松植に記念碑が建つたのは明治廿六年十月十二日で其頃は誰しも芭蕉は松植の生れと信じていたが、明治末年上野人の間に上野誕生説が出て同地に芭蕉の遺跡が多いところから生地までも上野と独断的に定めて天下に宣伝し、上松植はスッカリおぼろけとられた形となつた。世上数多く出版された翁の伝記もその生地を上野と言ひ或いは松植と言ひ定説がない。芭蕉の父儀左衛門は上松植から後上野に移り寺習師匠となり、明暦二年二月廿八日に死んで居るが、儀左衛門が上松植に住んだ事はその娘つまり芭蕉の母が安田の竹島家へ嫁いだと言ふ同家の過去帳や西川系図によつて立証される。これは最近伊賀町の郷土史研究家松尾早次氏等の努力により発見された有力な資料であつて過去帳には「湖岸宗江大師十三代景勝尊元禄十五年八月十七日没上松植村住松尾儀左衛門娘」とあり、左の西川系図の記載にピッタリ一致する。

宗義——義清——宗任——命清
 右門尉 左門尉 儀左門尉 女予竹島景勝室
 女予片野来寿室 女子堀内久信室 宗房松尾忠左衛門 芭蕉(幼名金作)藤堂新七郎二仕

38-併し是に依つても芭蕉が松植で生れたと断定を下す事はまだ少々弱い。要は芭蕉が父儀左衛門の松植在住中に生れたか、上野上り後に生れたかが微妙なポイントになつて居り、松植側にしても上野側に於てもこれを決定づける確かなきめ手はないのである。芭蕉の生年は母も父の上野へ出た年も判然とせぬのでこの真相はおそらく永久の謎ではなからうか。芭蕉は元禄七年十月十二日大阪の旅宿花屋で病没、近江義仲寺へ葬つたので同所に墓があるが、上松植の方角すにも「芭蕉翁松植遺主し

十二日長崎奉行に就けし十九年十二月九日死す年五十九法名洞英二牛心保善寺に葬る後代々の墓
とす。専ら森村島守可政のせ。後事は比前與左衛門正吉のせ。

正直を門下とす。長十六年東照宮に拜謁九奉。元和元年御小性組に列し七年米三百俵を賜う寛永十
年二百石を加え前地を改め上総國大多喜領内にす。五百石と知行し七年五月朔日三ヶ九修理
の奉行を勤む廿年三月廿六日遺跡をつぎ三年石を知行し四百石の地を弟正弘に令する正保二年五
月目付役として松平忠直の配所に赴く慶安三年閏拾月四日西城普請に勤め資金三枚給う四年九月
細川六九幼推挙るにより肥後熊本に赴き國政を監す明暦二年十二月廿六日布衣着御許さる萬治二
年十二月廿七日日光山に至り目付代を勤む。十二年三月勤を辞し各令に列す。延宝三年十二月二
日死す年七十三法名常年。専ら大河内善兵衛正勝のせ。

兄正直を門下とす。寛文七年四月十五日最前院殿に拜謁才進宝三年十二月十一日祖父の遺跡をつぎ
五年五月十日御小性組番工。元禄五年六月二日屋敷改め八月十二日御徒頭十二月十八日布衣着
る九年四月廿一日御目付十年正月廿八日駿府の町奉行十五至閏八月廿九日小普請。享保六年九月
廿九日死す年六十四法名常鉄。専ら荒川丹波守定昭の女。

影正直を門下とす。元禄八年四月朔日常憲院殿に拜謁十五才享保六年十一月廿八日遺跡をつぎ十
五百石を知行し五百石の地を弟平八郎長正に令する九年十月九日御小性組番工。十四年正月朔日
死す年四十九法名普恩。専ら織田伊五郎門信相のせ。後事は大奥の侍野村の經。

寛正二年正月十一日御使番十二月十八日布衣着を許さる寛延三年十一月十五日御光弓の頭盜賊退
捕の事を兼ぬ室暦元年二月廿一日死す年四十四法名宗忠。専ら山本七郎左衛門正武のせ。

正三藏長門守從五位下。室暦元年五月九日遺跡をつぎ十七才永地千五百石十二月七日停信院殿にまみ
る八年九月廿九日西城御小性組番工。十年正月廿六日遺物の事。十一年八月三日本城勤仕明和二年五
月廿八日御徒の頭十二月十八日布衣着を許さる四年九月廿四日御目付安永二年十二月十八日佐渡奉
行四年六月四日長崎奉行七月朔日從五位下長門守に叙任す天明三年三月廿日御作事奉行六年十一

月廿四日勘定奉行八年七月廿五日清水の家老寛政七年中納言重好卿逝去により八月廿九日清水勤
卷支配九年十月四日西城御小性組番頭。専ら戸田五助勝便のせ。

正陽堂三郎三藏。安永七年十二月十九日淡明院殿に拜謁十四才寛政二年十月廿四日御小性組番工四年
十月廿九日遺物の事九年十二月十八日中興の番工。専ら曲洲甲斐守景瀧のせ。後事美濃郡内膳のせ。

(家紋) 瓜、五七の花柄。丸に引兩筋、揚羽蝶、三頭左巴。
この系統は代々優秀な人物が出て居り特に二代正時は長崎奉行を勤めその録高も二十四百石と言う
旗本杉植氏中最高知行を受け、七代正憲又長門守に任ぜられ長崎奉行。勤定奉行等の要職につい
て居る。現在關東財務局勤務の杉植正武氏が十三代目の当主である。保善寺は今東京都中野区昭和
通二ノ二〇にあり。この一族の墓が沢山残っている。

◇織田系杉植氏分家系譜

正當長政平八郎平五郎。杉植平右衛門兄正の六男。享保六年十月廿六日父の遺跡の河内近江の内にて五
百石を分ち給い小普請となる。元禄元年二月二日大番延享四年九月十三日番を辞し室暦二年
四月廿一日死す年四十五法名幼心。牛込保善寺に葬る。専ら後藤半之丞長記のせ。

兄典正。平八郎平五郎。室暦二年七月二日遺跡をつぎ十二月十二日停信院殿に拜謁五年三月十六日大
番安永六年六月六日小普請組頭寛政三年十二月三日契の番工。八年六月廿五日番を辞し十二月十九
日死す年六十二。専ら美濃郡八郎右衛門茂英のせ。後事は山口十右衛門重頼のせ。

兄我平五郎。平八郎。天明七年四月六日淡明院殿に拜謁寛政八年十二月十九日家を継ぐ三十五才
専ら松倉教馬正郡の孫也。後事は太田吉盛方のせ。

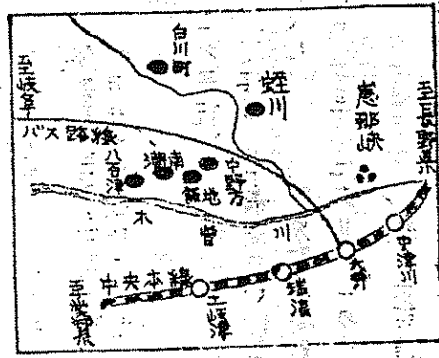
◇ 根田系柘植氏の家系譜

正弘安年 柘植平右衛門正時の子 寛永七年大猷院殿に拝謁御小姓組番士に列し二十年三月廿六日父の遺跡の内に於て四石を賜う正徳三年八月七日常憲院殿に附属 延宝四年七月二日死す、年六十二法名順清 牛込保善寺に奉る 事は平岩金石衛門正次のせ

正代正平作重内平正寛文七年二月廿一日蔵有院殿に拝謁御小姓組番士 元禄十四年四月六日死す、法名湛翁了寂 事は堀十兵衛利英のせ

弟正信 寛文五年五月六日 院政守 後織田を称す

弟某 寛平部 元禄九年八月十三日常憲院殿に拝謁 十四年五月廿四日死して家絶す



美濃の柘植一族

岐阜県下特に美濃地方には古くから柘植一族が集団的に住んで居り、美濃郡飯地村、中野町、大井町（以上何れも今は恵那市）加茂郡湖南村（今は八百津町）白川町などに最も多く其他中津川市、土岐市、瑞浪市、美濃加茂市にもあつて農業が多い。わけても湖南地区は住民の六割までが柘植姓で古くから柘植部落の痕がある。これに隣接する飯地村は柘植姓約二十戸柘植本家の家がこの部落の草分けで付近の十戸はその分家と言う。初代は墓誌銘によれば寛文十二年とあり三代目迄の氏名には宗の字が付いている。八代柘植咲五郎氏は明治三十六年東京に出て医師となり品川品海病院の院長であつた。今至氏が九代目で御令弟松臣氏は理博法大教

授でこの地方出身者の出世頭と言う訳である。現地は重宝たる山岳地帯で南は木曾の急流に臨み、その断崖上海抜六六〇米の高地に点在する小部落である。このような天険貧土の地に祖先は何故住居を定められたのか。おそらく戦の落武者残党の隠棲から初まつたのであらうというのが本至氏の意見である。今一つ考えられることは古来美濃木曾川以北地帯は南朝親臣の隠居地として知られてゐる。恵那郡蛭川村は南朝の残党平流川侍の隠棲地で後醍醐天皇皇子の遺跡もあり、南朝神社も祭花されてゐるので柘植氏の先祖は南朝の臣として転戦の上、敗残の身を此地に寄せ土農化したのではあるまいか。蛭川村は昔は平流川村と称した。平氏の流れをくむ者の村と言ふ意味であらう。此処にも柘植姓の家が現存する。土岐津小学校校長柘植工氏はかつてその祖母（嘉永三年生れ）の使用する日常語に、平家物語に出てくる特有の言葉がしばしば出ていたので平氏の末裔であるなど感じたと云つて居られる。又当時伊賀武士は宮門守護の役に任じた者が多く、清清の子家清から七代目の清泰が後醍醐天皇に奉属し忠功を顯したという古記録を思い合せて考えればこれに結びつくものがないとは言えない。してみればこの蛭川村が美濃柘植氏の発祥地かも知れないのである。

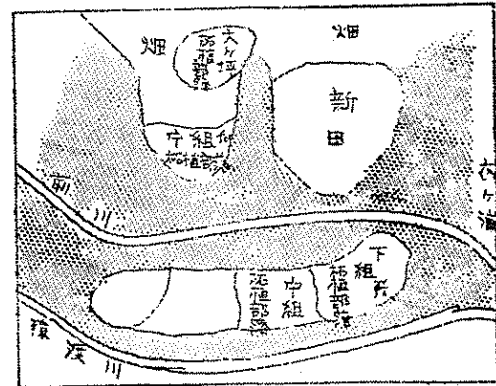
しかしその事実を明らかにする資料が得られない。幕末の頃勤王倒幕の声におびえる幕府が文献資料の湮滅と神社仏閣の破壊を命令し、苗木藩主がこれを実行した。め古記録資料が全く失われ、その歴史を知ることが出来ないのは残念であるが、この柘植一族は県内市街地は勿論、名古屋市内にも多く進出しその壁くべき繁殖力は発祥地伊賀を凌ぎ、大きな流れとなつて今や全土に拡がりつつある。

本稿の資料は柘植本至氏、柘植新之助、柘植敬利氏より戴いた。

三河刈谷の柘植部落

愛知県刈谷市にもかなり大きな柘植部落が存在する。徳川時代、三河と尾張の国境に知多半島と向い合つた衣ヶ瀬の奥に当る刈谷市の大字小垣江という所、此処の中組、下組、大ヶ坪三部落合せて百五十戸位の殆んど大部分が柘植姓と言う文字通りの柘植部落である、主として農家であるがいつ頃からこの部落が出来たのか記録がないので確かな事は判らぬが、戦国時代豊臣に仕えた柘植氏の先祖が関ヶ原の戦に敗れ三河に下つてこゝに土着したのが初まりらしい。ところが本家がこれ不明だがこの出身で今伊丹自衛隊に勤務される柘植政昭氏の家は相当古く今九代目で過去帳によると初代が延享四年（今から約二百十年前）に没して居り、六代守吉、七代勘助、八代寛正の名が判明して居る、七代目は八十五才の長命を保つたが武士であつたらしいので刈谷城に出仕したものとと思われる、中組では地面を深く掘ると貝ガラが出てくると言う、先住者は初め漁業で生活し、次第に農地を開拓して行つたものと考えられる、そして次々に分家が殖えてついに現在の大きな部落に発展したのである、この柘植氏定紋は「横モツコ」である、略図は刈谷市柘植林氏の提供による。

この他三河では東加茂郡松平町や西加茂郡三好町にも柘植姓の部落がある。



東から 西から 各地遺聞

◇磐城の柘植氏

奥州白川藩十萬石阿部能全守（現福島県白河市）の藩士に柘植氏があつた、初代は元禄年間源太右衛門と名乗り五代目から助之丞となつた、五代柘植信吉は武州忍藩松平家に仕え、六代助之丞信金から白河藩に移り御柘筆を勤め三百石取りであつた、廃藩後八代信謙以下学校教員と存り現在和歌山県居住の柘植重信氏が十一代目に当る、代々の墓は白河市の浄土宗常宣寺にある、家紋は左三ツ巴と丸に二引。

◇武蔵の柘植氏

武蔵国忍（現埼玉県行田市）松平下総候の臣に柘植善太夫あり、幼名幸六郎末の武術家、真影流の奥儀を伝へ梅津大島流、後松平右京大夫の臣加地市之丞の門に入り高弟となる、明治元年五月官軍に加わり奥羽の役に従ひ白河口に戦死す（大人名辞典より）

この柘植氏の先祖は忍藩松平公が伊勢桑名から養子に入つた時桑名から供奉したもので、現在群馬県桐生市

◇遠州の柘植氏

浜名湖に面し静岡県引佐郡細江町祝田宇谷田という処に柘植姓の家数戸あり、七百年前の年号と彫込んだ棟木の家があるのて相当古くからの柘植氏と思われる、横浜の柘植賢次郎氏はこの御出身、三方原古戦場の隣接地と言つのでやはり戦国時代の武士が住みついたものである、定紋は丸に花おもてか

◇尾張の柘植氏

愛知郡の豪族で諸輪南成に據る、尾張志によれば「庄屋眞野勘右エ門が居屋敷これなり、勘右エ門の家は古代より此地の郷士にして先祖は柘植道昌と言う（道官の諡？）これより世々絶えず村長となり承れるが近世に眞野と改めたりと、天文の頃山口九郎次郎の足輕大將に柘植宗十郎と言うはこの同族ならんし、永録の頃柘植玄蕃元は同郡丹下城に據る、又佐久間盛政の將に柘植喜左衛門あり、天正八年加賀石川郡鷹巣城を守り飛騨の鎮とす。

以上の記録によつて考察すれば山口九郎次郎とは当時鳴海の城主山口左馬之助の子息であつたし、丹下城は鳴海の北にあつた、諸輪南成又同郡下にある、天文二十二年

磯田信長が十九才でこの鳴海城を攻めてゐる。現在鳴海から東南に當る桑知郡豊明町には約五十戸程の柘植姓部落があり、鳴海町にも柘植姓がある。又今は名古屋市に入つてゐるが鳴海から近い瑞穂区の辺りは昔から柘植氏が多い。これらは皆戦國時代桑知郡下の城に據つて活躍した柘植氏の子孫であらう。

◇越前の柘植氏

徳川家康の二子秀康が城家の善子と成り慶長五年越前福井城へ関ヶ原の戦功により六十万石で封ぜられた時、その家臣に柘植小平次四百石、柘植忠右衛門三百石の名が拾帳に記されてゐる。その子孫は代々福井藩に仕え幕末頃福井藩内を放逐した指南役であつたと言ふ福井に墓所があるが系図は亡失。この柘植家の当主は東京の柘植一雄氏である。又加賀藩にも柘植平作三百五十石の名が記録されてゐる。

◇伊勢の柘植氏

伊勢山田奉行に属して代々役人を勤めた柘植氏があつた。上代の名は不明だが六代柘植恒左衛門重政嘉永二年卒、七代七郎右衛門博文は文久二年卒、八代祐太郎光聖は明治四年三重県少属に仕せられた。十代目に當

◇出雲の柘植氏

島根県出雲市に柘植姓の家十戸程あり。元は伊賀から移住したもので本家は既に絶家となり、同市今市町の柘植貞蔵氏は分家の十代目に當る。かつて国鉄駅長と勤めた人、尚邑郡石見町にも若干柘植姓がある。

◇四国の柘植氏

四国高松藩に仕えた柘植氏は寛永十九年松平頼常十二万石で高松へ封ぜられた際、伊勢方面から移つて来たらしく、その子孫には藩の指南役を勤めた人もあり、代々の墓は高松市の見性寺にある。第十四代柘植宗孝氏は大蔵省官吏で四国各地の税務署長を歴任し昭和十年十一月廿一日高松で病死。系図は戦災で焼失。宗孝氏の子孫は甥の連生氏が相続して現在大阪府池田市に居住、その家系は二人は東大法学部と京大工学部に在学中と言う。同じ松平家に属した分家の跡に柘植幸雄氏、柘植敏雄、岡田財勢部長、柘植五郎、岡田の三兄弟があり、本分家共まことに輝やかしい秀才一家である。

◇九州の柘植氏

-48- 筑後田主丸(福岡県津羽郡田主丸町)で代々庄屋を勤めた柘植氏があつた。菩提寺には十五代にわたる墓が

る柘植重氏(現在三重県飯南町に居住、一志郡安曇郷村(現津野町)にも柘植氏がある。津市には藤堂家の旧家臣であつた柘植氏の子孫柘植隆一氏居住)

◇河内の柘植氏

安宿郡(現大阪府河内郡国分町)の名族で柘植常彰号竜州叔慎は匠と浪井園南に学ぶ儒者中井竹山に受け文をよくす。世に始めて回蟲研究書を著し高阪侯に仕えた。其子常憲幸馬は中井竹山に学び又京都頼山陽の門に遊ぶ。文政十二年国分村に帰リ翌年立教館を創立し子弟を集めて経史百家の学を講ず。文久三年学寮を増築し文武両道を授け明治六年卒す。其子常華又経史に通じ詩文をよくす。この柘植家は戦後に断絶した。

◇岸和田の柘植氏

柘植弥左衛門尉宗成は寛永年間大垣郡公に仕え肥後島原陣の功に賞を受け了時浪人武藤源左衛門之を妬み宗成を斬る。其子宗正十八年関釜心の末明暦元年十二月廿八日江戸に於て仇敵を討つ其後宗正は浪州岸和田に移り柘植家の仇討として永く岸和田藩に伝へ仇討百番等の書に族る。その系図も保存されてゐる。

残つてゐると言う。最後の人物は長平氏が十六歳の時出奔して三井郡小郡に定着した。その孫に當るのが現在神士録登載の柘植陽太郎氏、柘植参雄氏、柘植格氏であり九大教授柘植乙彦氏、福岡の柘植光氏、柘植俊吾氏も同様である。この系流と先祖に於て関係ありと考えられるが長崎市現住の柘植喜代太氏の先祖は寛永年間島原乱後、坂後三池から長崎県南高来郡北有馬村に移住し農業に従事。明治二十年頃長崎市に來り喜代太氏は材木商。その御一族がそれぞれ長崎市内に居住される。北有馬村は島原成跡から約一里の所に現在も柘植姓の墓が三戸ある。これら柘植氏の元はいずれ伊賀から移住したものである。うと考えられるが、いかなる事情あるいは経路をもつて九州に渡つたか今は知るよすがもない。

◇石川侯家臣の柘植氏

慶長の頃大垣城主石川家成、同康通公の家臣に柘植文太郎柘植半三の名があり、慶長十九年大坂冬の陣に柘植六兵衛は石川忠総の臣として出陣大功あり六兵衛は敵首一柘植作五左衛門敵首三討取つたとの記録がある。又慶安四年四月石川昌澄伊勢龜山城主となつた時その家臣に柘植左平治(後佐五左衛門百五十石)が居り宝永四年卒その子又左五左衛門を名乗り石川侯に仕えた享和六年立退



雑 録

柘植氏蔵書印

室永孝保年間の人柘植知清は家書蔵の茶器類の中に「柘植大炊壺」と言うのがある、茶道具類には大名將士の名前のついた物が多いが彼等の中に款寄者があったことが判る、柘植大炊介は徳川幕臣の家臣であつた。

柘植大炊壺

駿府御禮物分配帳によると徳川家康被藏の茶器類の中に「柘植大炊壺」と言うのがある、茶道具類には大名將士の名前のついた物が多いが彼等の中に款寄者があったことが判る、柘植大炊介は徳川幕臣の家臣であつた。

俳人柘植氏

時代はいつ頃か古い俳人系譜中に旭庵風谷の門下として柘植其文の名がある、又明治の初め伊賀の人上柘植の医師柘植健作は四沢と号し俳句の他に漢詩和歌にも長じた、その子百堂（嘉永五年生れ）医師、これ又「吐雲」の俳号と号し、歌仙の巻ける人であつた、他に郷土俳人として「かへる」談同人柘植一素、これは大正年間の人である。

犯罪史に残る柘植氏

いつの世にも罪を犯す者は絶えないが数少ない犯罪史の中にも犯罪史に名を留める悪人が居た、犯罪者柘植氏を記録する事は寒心に堪えぬが事實として伝えもつて後世の戒めとしたい。昭和初年の頃新聞紙上を賑わした事件、東京丸ビルを舞台に何万円の竊抜詐欺を働いたのが柘植利平で彼は捜査に血眼の警視庁へ「俺は絶対捕らな」と嘲笑の一筆を残して上海方面へ高飛した、後年内地に舞戻り他の軽犯罪で捕まつたが既に詐欺事件は時効にかかり警視庁を口惜しがらせた、利平は明治十八年生れ岐阜県那珂中野方出身でかつては警備官を勤めし、敏腕を謳われた名刑事であつた、今一つは戦後間もなく河内で起つた殺人事件で首高取藩の典医を勤めた河内の名家柘植家の一少年が伯母を殺害し後自分も自殺体となつて発見された、あるが、この柘植家は肺結核で一家次々に斃れ孤独になつ

儒医柘植氏

明治十三年十二月五日儒医柘植高城歿す、判らぬが年七十二、医業救荒私言、老子訓釋、時勢策、儒學論古義等の書ありと。又三重県出身陸軍二等軍医柘植龍日露戦役後備兵より召集せられ歩兵第二十二聯隊付として従軍、清國にて病に罹り明治三十八年十月十日開原平館病院許家台分院に於て死去す、戦功に依り勲六等功五級に叙せらるゝとあり。

有馬の柘植の間

昔の御殿に於らつて旅館などの客室名に植物の名を附けたのは多いが、神戸有馬温泉の中庭と坊という旅館には「柘植の間」がある、もし有馬へ旅行の機会があればこの部屋に一夜の客となり、柘植の間の柘植さんとシヤレてみるのも一興であろう。

野球人柘植氏

現代スポーツ社会に柘植氏の名を見る事は少ないが野球選手として名古屋東邦商業出身の柘植康之君が富士製鉄釜石から最速福島県常磐炭鉱に移つてノンプロ野球界に活躍して居る、その弟桂君もかつて東邦商業三塁手であつた、又中京商業から立教大学の外野手であつた柘植肇男君（鳴海町福川）は卒業後日鉱日立の野球部に加わつた。

文学に現れた柘植姓

少年もやはり結核に冒され自殺と断絶と言う哀れな終末となつた。週刊サンデーに連載され単行本にもなつた司馬遼太郎原作「風の武士」の主人公は柘植信吾と云う伊賀の血を引く若武士で隠密となつた活躍するがテレビでも放送された又村上元三作連続ドラマ「黒百合城の兄弟」はNHKテレビで放送伊賀の忍若者柘植十太夫が登場した、柘植一族に忍者があつたかどうか判らぬが伊賀流忍術の開祖は有馬地三太である、山岡莊八著徳川家康の第八巻には柘植三之丞清広が血宗内する件を扱つてゐる、又中山義典著「柘植の日記」は昭和十五年京都甲鳥書林から発行された本で、随筆集として書かれたもの、内容は直井素庵にも関係ありようだが柘植姓を使つたのが珍らしい、東京の柘植正武氏が所蔵して居る。

明治38年9月10日生 東北大生物科卒	明治35年10月14日生 三重県中兵衛長男 東大教授 施設部長 同建築科卒	明治45年1月15日生 久米市 工学博士 九大教授 九大機械工学科卒	明治42年6月12日生 香川 吳助三郎三男 盛岡財務部長 關大高商部卒 高文合格	大正3年8月5日生 福岡県六蔵長男 通産省通商局 輸入課長 福岡師範卒 高文合格	明治38年2月23日生 岐阜県国民金融公庫江東支所長 日大高師卒	大正2年4月27日生 愛知県碧海郡 川崎製鉄東京支店材料部長 名古屋高商卒	明治41年1月15日生 岐阜県南村嘉雄長男 日本文藝雑誌 中糸油田開発部長 京大治金学科卒
--------------------------------	--	---	---	---	---	--	--

現代伍植氏芳名錄
(敬錄略)

学校法人

拓植學園

珠算の通信教授から発足して、今は堂々たる学校となり同族中にも特異の存在である。柘植学園は、愛知県西加茂郡三好町出身の柘植八郎氏（又吉二男）が創立されたもので、大正末期愛知県勝川や岐阜県多治見に本拠を置いたが後群馬県に移り、珠算塾として盛んに新聞雑誌等に宣伝していた。この御記憶の方もあろう、本校は高崎市本町三ノ九六に分校は前橋、桐生、波川、安中にあり、本年十月八日学校法人の認可も下り本校は鉄筋三階建が完成して面目一新、八郎氏は数週間もなく死去され

柘植
武

柘植省三

柘植正三

柘植
格イシヤ

柘植敏雄

柘植盛男

拓植芳男

柘植秀臣

柘植新

杞植忠雄

柘植憲邦

柘植參雄

柘植陽太郎

柘植宗俊

柘植美夫

拓植博

明治33年1月22日生岐阜縣地村第五郎男家知卓 入鹿温泉株式會社創立事務所長 加茂農林部科卒	明治43年8月30日生靜岡縣長太郎男三井銀行檢査 部參事慶大經濟學部卒	明治26年3月10日生埼玉縣之丞四男共立綴物株式 會社社長	明治39年1月1日生奈良縣萬五郎三男大阪商業信用 組合常務理事彦根高商卒	明治31年1月13日生奈良縣萬五郎長男 山本允介分 岐源綿綬技師部長 武藏工大教授 京大工学部卒	明治27年10月10日生岸和田宗信二男第一火災海上保 險相互會社專務神戸高商卒	明治44年7月5日生名古屋市瑞穂區六三郎三男 東京不動產管理株式會社取締役營業部長東北大法文學部卒	大正3年1月25日生愛知縣 協和銀行半田支店長 名古屋跡高實業高卒
---	--	----------------------------------	---	---	--	--	--------------------------------------

類似姓

柘ト一字でツゲと読むこの姓は名古屋に多く先祖は愛知県海部郡大増郷村（現名古屋市中川区）で庄屋を勤めた宗兵衛右衛門等へのがある、東京京都にも一族現住

つげ
黄楊ツゲ 西宮市に昔楊子子
柘ト 京市に終君子ツゲノキ
柘植トシ 中野に柘植山秀一氏
柘植野トシノ 田淵駅長柘植野房次氏
柘山トヤマ 市商工会頭柘山寿郎氏
柘本トモ 屋に柘本洗蔵氏他
柘ト 市税関に柘榴鎮天氏
柘ト 姓はよくは見当らぬ

柘植 鬼一

明治35年1月20日主東京部
晃洋社美術印刷所KK代表

柘植 林

大正6年10月19日生愛知縣刈谷市
刈谷同合印刷KK常務取締役

(以上日本紳士録日本紳士年鑑人事興信録より)

◇職員録より

柘植 正武 関東財務局管財部物納財産課長
柘植 利雄 東北財務局山形財務部統務課長
柘植 照夫 東京中野検察庁主任捜査事務官
柘植 忠雄 東京都民生局中野福祉事務所庶務係長
柘植 宗春 東京都板橋区立中根橋小学校校長
柘植 昌利 運輸省八戸海上保安部救難係長
柘植 信之 千葉県本更津郵便局郵便課長
柘植 健次 日本住宅公団名古屋支所
柘植 鉦太郎 名古屋市財政局固定資産評議員

柘植 繁夫 名古屋地方裁判所犬山簡易裁判所書記官
柘植 東九郎 愛知縣瀬戸市下品野小学校校長
柘植 宗敬 愛知縣江南市民生課長
柘植 進輔 知多郡東浦町緒川小学校校長
柘植 工 岐阜県土岐市土岐津小学校校長
柘植 茂男 愛知縣市林務課長
柘植 教利 中津川警察署署理官
柘植 八郎 中津川市助役
柘植 茂 中津川警察署統務係長
柘植 孝八 中津川市臨時制高教諭
柘植 天彦 羽島高校津分校教諭
柘植 勝敏 關警署警務課巡查
柘植 虎雄 三重県警務所四日市所長
柘植 隆一 林業事務所四日市所長
柘植 伝 鈴鹿市農林水産課畜産係長
柘植 輝己 国鉄紀勢本線紀伊勝浦駅長
柘植 進 日本専売公社小田原工場
柘植 鏡雄 日本専売公社京都工場経理課
予算事務主任

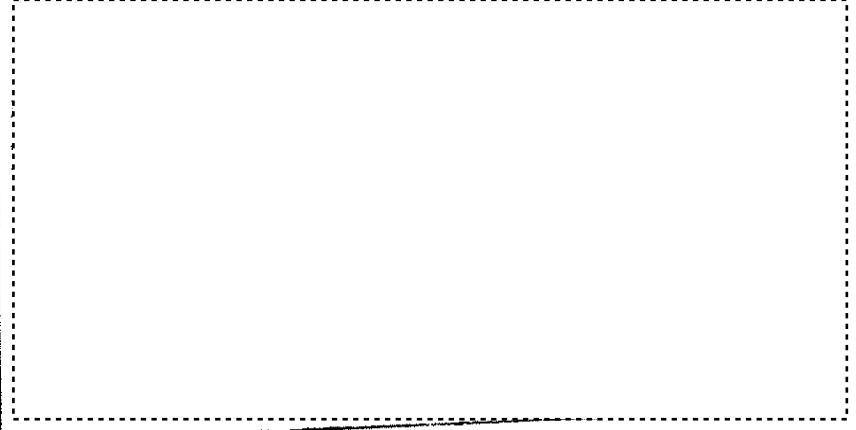
柘植 武雄 金物商
柘植 清隆 バンド師
柘植 吉二郎 木工
柘植 暉 送店KK
柘植 栄子 栄子

◎電話番号簿其他より

柘植 智一 日本航空KK京都営業所長
柘植 評内 迎畿日本鉄道KK本社
柘植 敏昭 伊丹駐屯36普通科連隊一等陸尉
柘植 義行 神戸少年鑑別所会計係長
柘植 利久 近畿大学農学部教授農学博士
柘植 乙彦 九州大学教授医学部
柘植 己一 鳥取大学農学部講師
柘植 輝天 理研光学KK購買課長
柘植 誠 三菱石油KK総務部
柘植 順治 西大寺日本エクス工業KK研究室
柘植 康之 福島県常磐炭鉱KK野球場
柘植 啓子 琴平電鉄観光バスガイド
柘植 茂夫 国鉄刈谷支店区長

柘植 かく天
柘植 一雄 旅館
柘植 余次郎
柘植 三郎 運送
柘植 ゴム工業KK
柘植 佐武郎 清物
柘植 作太郎
柘植 茲想 信信
柘植 茂男
柘植 清一 印刷
柘植 節子 運動具
柘植 ハマ 服地
柘植 初子 著述
柘植 彦次郎 接骨術
柘植 小み
柘植 房江 医師
柘植 文雄
柘植 正夫 金網
柘植 正道

柘植 幸雄 匠師 神
 柘植 美知男 華道
 柘植 行重 実バン
 柘植 幸郎 洋裁
 柘植 厚子 建設
 柘植 清信 アート
 柘植 倉吉 菓子
 柘植 準平
 柘植 直義
 柘植 利之 東京
 柘植 清岡
 柘植 表具店
 柘植 政治
 柘植 賢次郎
 柘植 二郎 茶
 柘植 虎雄 板金
 柘植 松雄 板金
 柘植 準造
 柘植 清 神
 柘植 和之介 電機



柘植 幸雄 匠師 神
 柘植 美知男 華道
 柘植 行重 実バン
 柘植 幸郎 洋裁
 柘植 厚子 建設
 柘植 清信 アート
 柘植 倉吉 菓子
 柘植 準平
 柘植 直義
 柘植 利之 東京
 柘植 清岡
 柘植 表具店
 柘植 政治
 柘植 賢次郎
 柘植 二郎 茶
 柘植 虎雄 板金
 柘植 松雄 板金
 柘植 準造
 柘植 清 神
 柘植 和之介 電機



柘植 可希達
 柘植 鏡次郎 調音
 柘植 鏡市 官吏
 柘植 産葉 家畜
 柘植 繁夫
 柘植 製作所 鉄工
 柘植 忠太郎 浴場
 柘植 津ね 酒造
 柘植 鉄工所
 柘植 辰子 米穀
 柘植 豊一 新聞社員
 柘植 米子
 柘植 重雄 木製製作
 柘植 丈山 飲食
 柘植 清次郎 会社員
 柘植 力 電気工事
 柘植 兵次 鉄工
 柘植 修三 会社員
 柘植 三子 古着
 柘植 博治 金具
 柘植 鉦太郎 会社員



柘植 喜美 紙屋
 柘植 光太郎
 柘植 産業 KK 森物
 柘植 鈴江
 柘植 文子 美容院
 柘植 正美 織物
 柘植 淳一 酒販
 柘植 たい 煙草
 柘植 鉄太郎 半端
 柘植 武次 教員
 柘植 一郎
 柘植 銀次郎 染色
 柘植 銀太郎 染色
 柘植 幸吉
 柘植 市吉 青果
 柘植 鉦一 菓子
 柘植 仙吉 会社員
 柘植 竹三郎 会社員
 柘植 くら 菓子
 柘植 仁一 接接
 柘植 芳秋 金具



柘植 鎮 会社員
 柘植 金之助 土産業
 柘植 三郎 青果
 柘植 農機店
 柘植 春彦 ランチ
 柘植 義治 種苗
 柘植 自転車店
 柘植 一電線装置
 柘植 忠義 化粧品
 柘植 きし子
 柘植 内科小児科医
 柘植 滝夫 青果
 柘植 美造 製麵
 柘植 秋三郎 農業
 柘植 材木店
 柘植 菓子下駄店
 柘植 武夫 食堂
 柘植 花屋
 柘植 美佐次郎 燃料
 柘植 省三 技術士
 柘植 都男

柘植 豊松
 柘植 勘三郎 製粉所
 柘植 司書 三事務所
 柘植 寝具店
 柘植 仙太郎 製麵
 柘植 敏郎 公務員
 柘植 政夫 米穀店
 柘植 金至
 柘植 峯吉
 柘植 クリーニング店
 柘植 一郎 旅館
 柘植 淳介 農園
 柘植 輝夫 石材
 柘植 万二 製材
 柘植 勲治 瓦
 柘植 勲市 雜貨
 柘植 工業 KK 建設
 柘植 五郎 醬油
 柘植 三郎 齒科医
 柘植 巽 建築
 柘植 金一 洋家具

柘植 利平 治
 柘植 猛
 柘植 佃 鮮魚
 柘植 義彰 水産品
 柘植 洋一 電機
 柘植 農園
 柘植 智重
 柘植 愛弥 医師
 柘植 勇夫 医師
 柘植 英吉 農業
 柘植 柳造
 柘植 貢
 柘植 底蔵
 柘植 次郎
 柘植 鉄治郎
 柘植 利博
 柘植 湊吉 会社員
 柘植 敬一郎 染色
 柘植 幸夫 織物
 柘植 勝三郎 鏡商
 柘植 銀蔵 ラジオ

柘植 至米 アパート
 柘植 久美子 菓子
 柘植 国枝 旅館
 柘植 信夫 紙工
 柘植 速生 製粉
 柘植 爲蔵
 柘植 治三郎 染物
 柘植 皇信 測量士
 柘植 貞蔵
 柘植 五郎 医師
 柘植 広治
 柘植 光 会社員
 柘植 宗忠 呉服
 柘植 喜代太
 柘植 国雄 材木商
 柘植 正彦 歯科医
 柘植 八郎 木炭商
 柘植 伊作 材木商
 柘植 千万 荘
 柘植 秀雄 会社員
 柘植 玉野

